< 5
4343

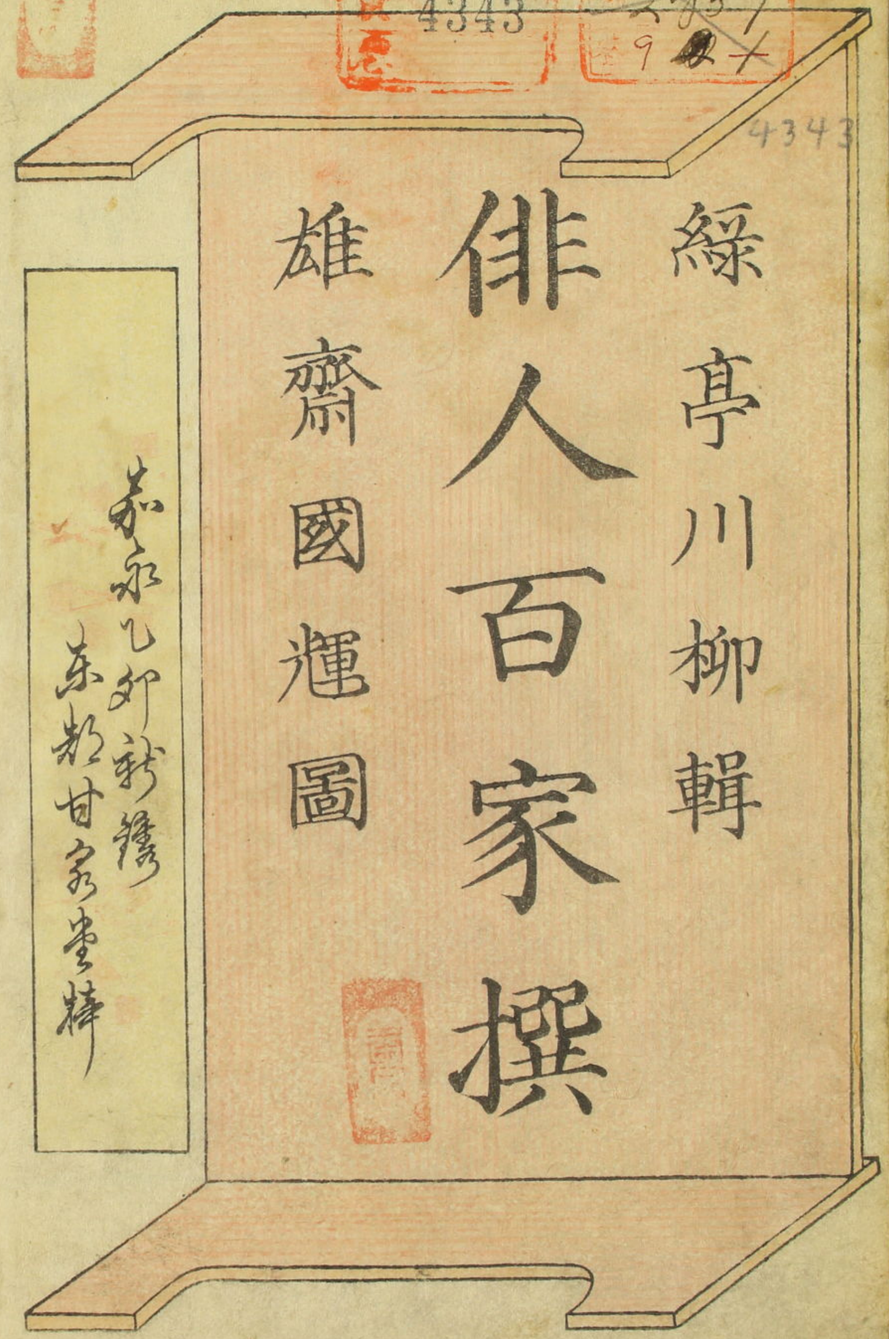
4343
2857
4343

綠亭川柳輯

俳人百家撰

雄齋國輝圖

嘉永乙卯新鐫
東都甘家堂梓



史俳祖の名ハ古今和歌集に出て世ゝに風骨清く其り
其筆は達人を守武宗鑑を祖とし貞徳に式を定め
宗因に談林の一派をひこり芭蕉翁中興之志かたりし
より貴きも誹きも俳を学ばざるハ稀く句集を演ぬ
其砂の数を知らねど皆始ハ此を詠めて歌仙の色紙
[illegible]月に編しては百韻の世情を尽しみより堅の春
[illegible]松高の秋乃ことぞ是ハ根のねもごろに世に傳へぬると
集評あるやそこの中に手法吟置てる説近くゆゑる風
調これ彼所集て重嚢に評せふれど玉の都出がほ[illegible]ひさめ
[illegible]只古を志のぶ仙にて遂に俳人る撰とはなしぬ志は葉州の
のりをあどに似られども宗云を吐て人を欺きやうにハ[illegible]
[illegible]の求に志さがふ是智者の眼にふると[illegible]
[illegible]ひとなり[illegible]にしとはぐりをも忘れて拙き筆を集ること志のり

嘉永八卯新鐫

綠亭川柳

芭蕉庵の旧地ハ
深川六間堀要津
寺同所長慶寺ニ
古墳ありこハ佛頂
禪師現住の地にて
翁由縁の寺なり
古池の吟ハ今の
松平遠州侯の庭中
ニ存せる池ありとの
辺ニ昔庵の在ゝ
此句なり延宝の末
桃青伊賀の上野
を出て江戸ニ下り
鯉屋杉風家ニ入

後薙髪して素宣と
改又杉風より芭
蕉庵の号を譲請
て夫よりのち彼地ニ
庵を結ぶ此古池ハ
原杉風が籞にて
ありしぞ

古池や　もせ我
蛙飛こむ
水の音

應需
玄魚縮墨

先哲叩俳

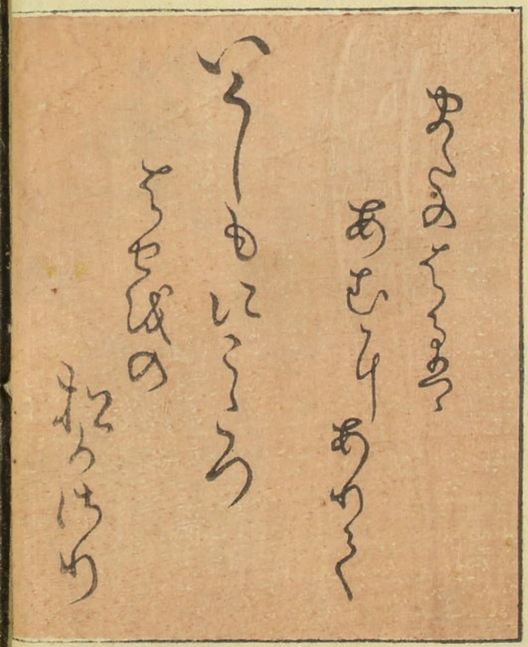
雛屋立圃筆

芭蕉十哲
蕪村筆意

去來
許六
支考
北枝

其角
丈草
嵐雪
野坡
越人
曽良

芭蕉翁



北村湖春

樂翁侯

往古の發句体

[illegible]

職人盡發句競

[illegible]

五老井許六

[illegible]

辞六

東花房支考

[illegible]

番匠

[illegible]

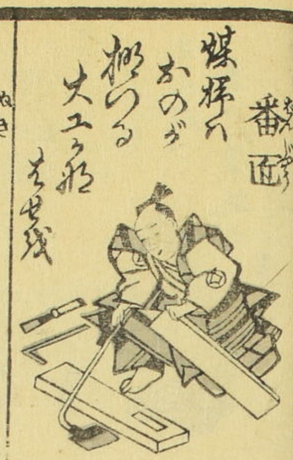
幣ふり

[illegible]

立甫

鍛師

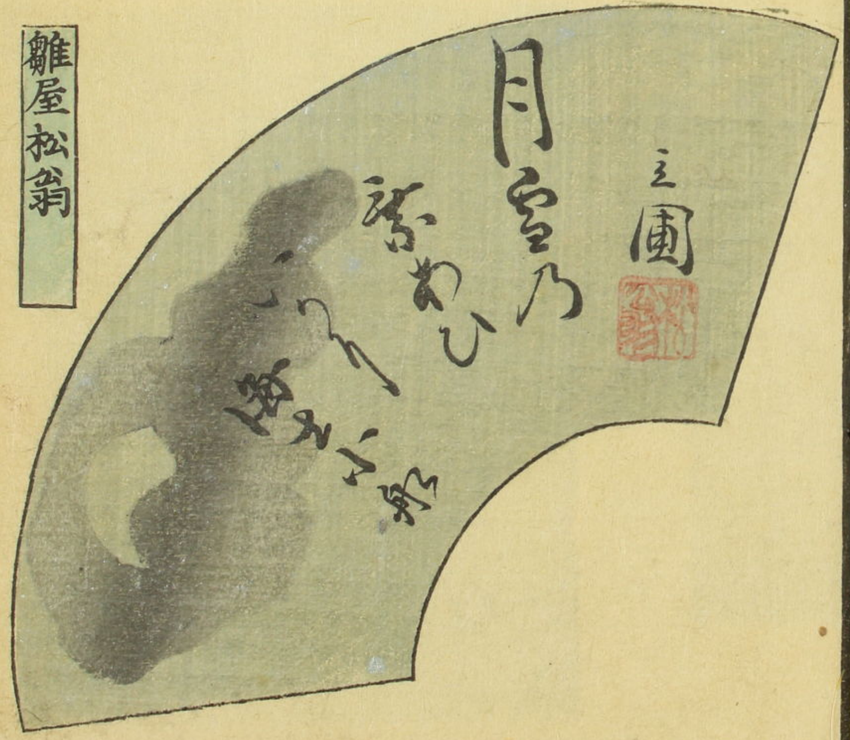
[illegible]

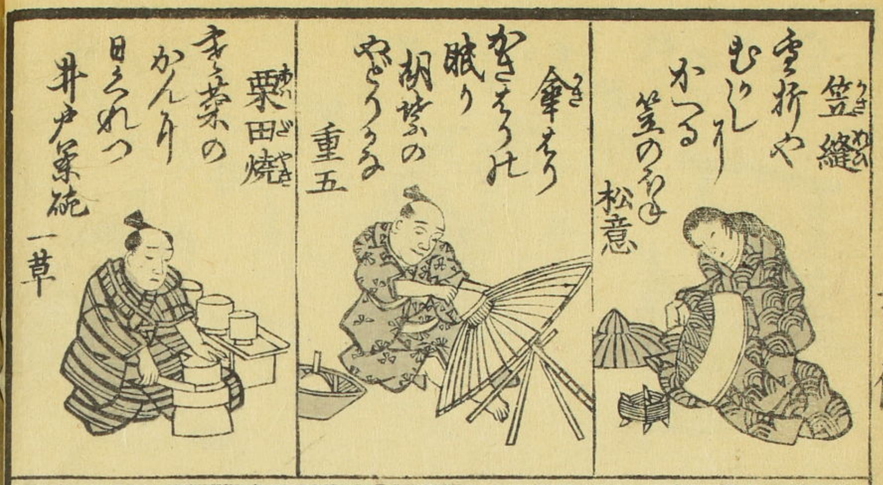


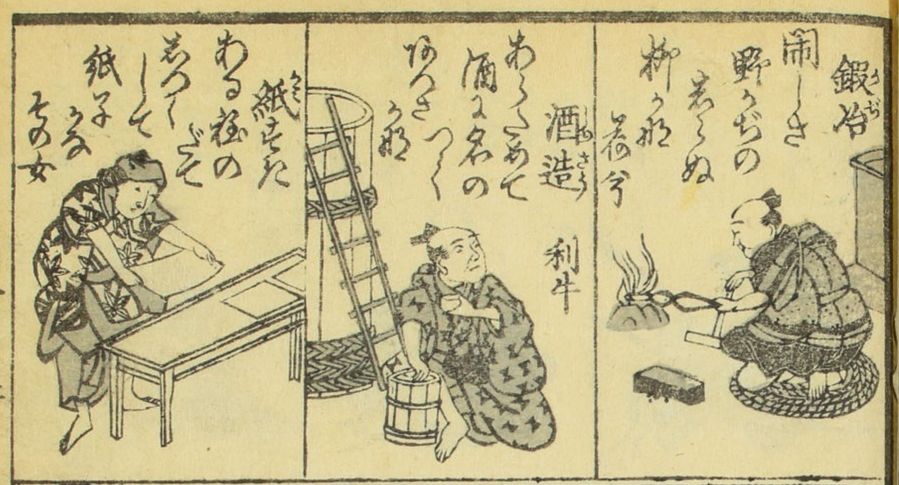
一笑

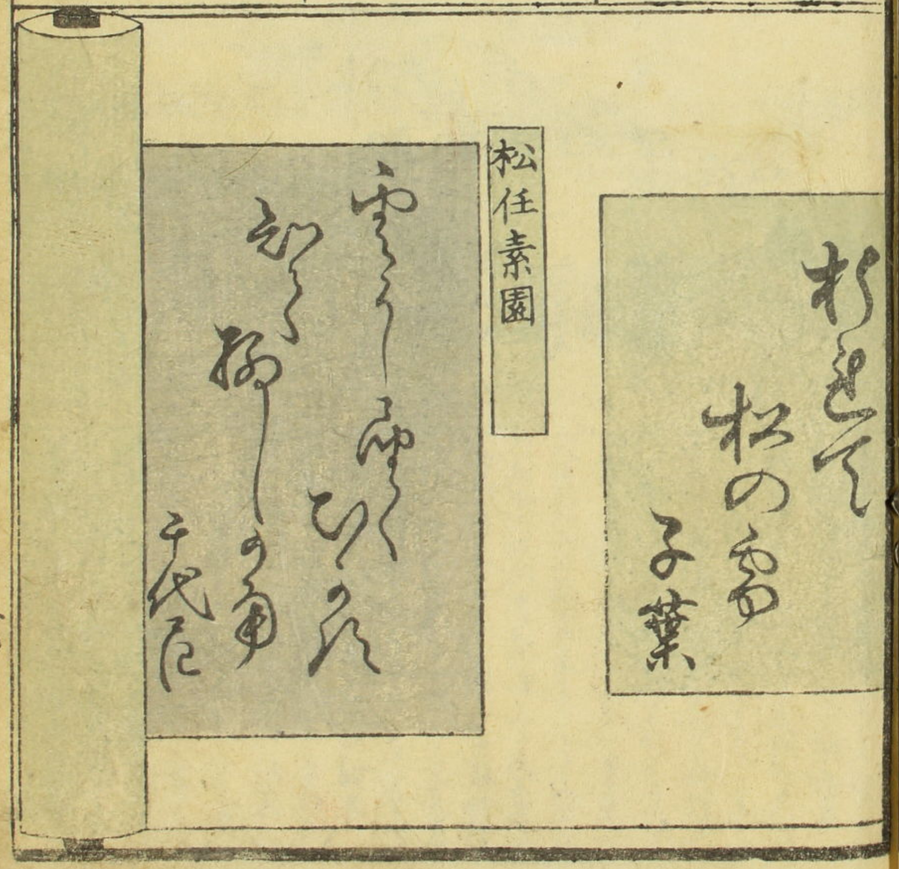
雛屋松翁

[illegible]




笠縫
雪折や
むしゝ
かつる
笠のなり
松意
傘
かきたり
眠り
胡蝶の
やどりかな
重五
栗田焼
きゝ菜の
かんり
日えれつ
井戸菜硫
一草


鍛冶
鬧しき
野うぢの
おとぬ
柳かな
春兮
酒造
利牛
あらたあて
酒の名の
なつさつく
かな
紙
ある極の
おつくどて
しして
紙子
かな
その女


宝晋齋
煙
開や
海を
よめい
金のなす
其角

大高氏
山をぬくかと
松の
子葉

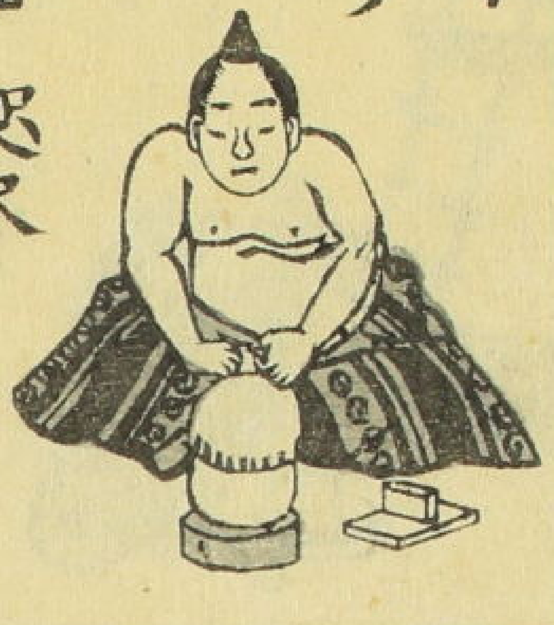
松任素園
雪くしゝ
ひくれ
むくなし
千代尼

ものぬひ

縫物やきもせでよごす五月雨　羽紅

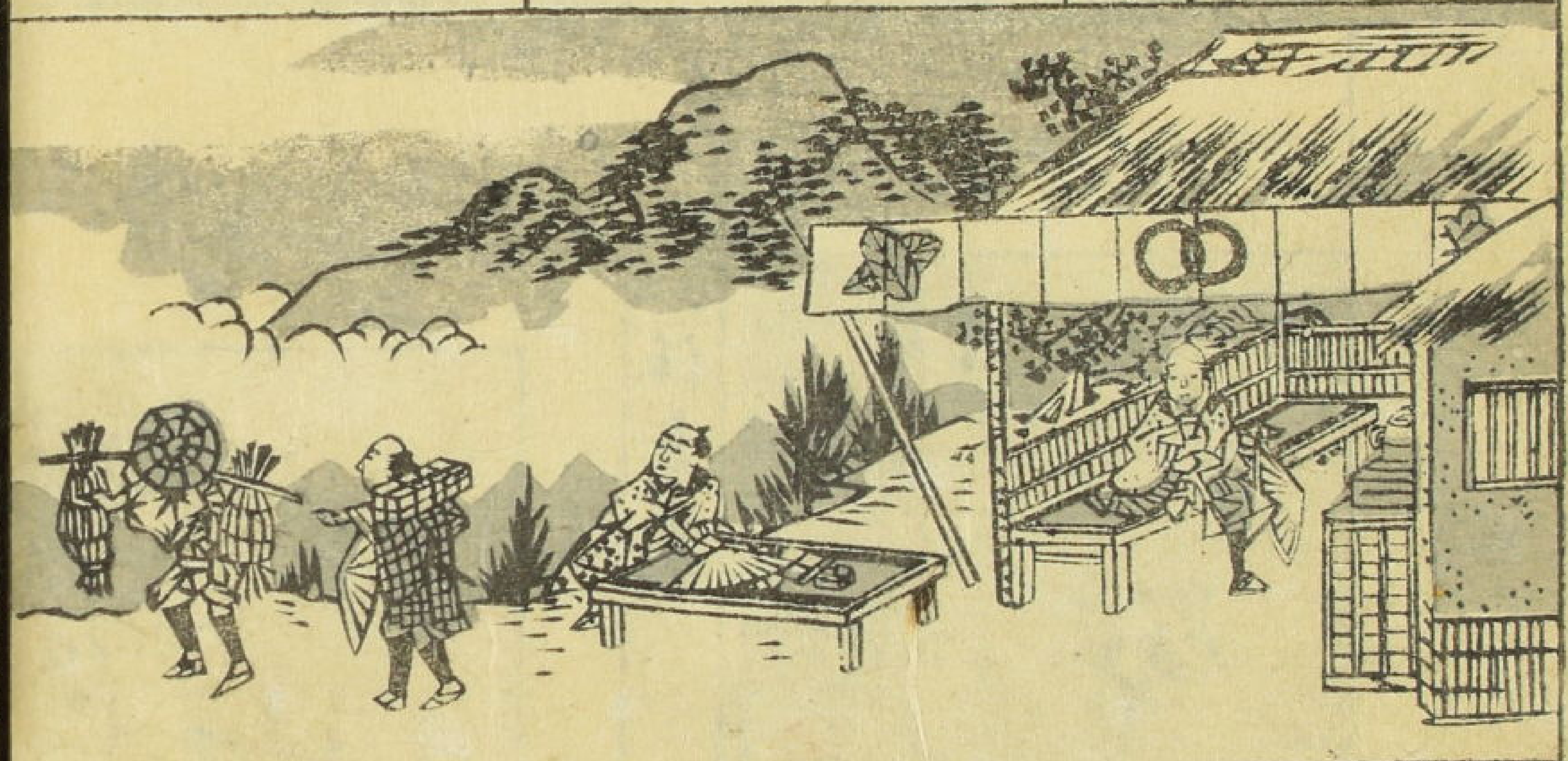
鞠師（まりし）

いてやまうらま花の日もちろ九日　咫尺



弓師（ゆみし）

箏のこゑより志ゝし弓の弦　去来



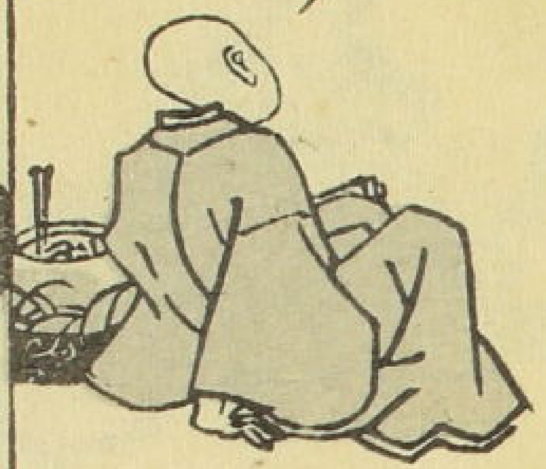
甚角が庵の後ろに尾花の生茂り
しを新入ありて何患と思ひしに文七と市
元結にて生世の名ひろまりし嬉しさに
おつふひしとりへば其角途みさうく
文七が妙うかれの庵のかざつくり
此句後の世へが菅丞相御初年の
時牛の子れ侍るに牛の形を惜み
牛の子は守られ庭の柳牛
法の神りとても白のさる文に
文七の句をは眼前のりしく其角
天神を信ずると深くして後勧請
の次其の辺にて酒呑んと約束
ふ行く此所ハ酒満寺ちてそこに満へ
一里先へ行てへのを見へ其角
はぶへり田けかれはかりのを
卜なそつまして陸子ゆのちれて
出而でて春べれどもりの
甚角陸子を快そりつれバ天神
の像ありて人の上は神祠
とはなり生涯信心せしとぞ

土器作（かわらけつくり）

ぬきこゑや大かけゝよの初ね哉　任行

連歌師（れんがし）

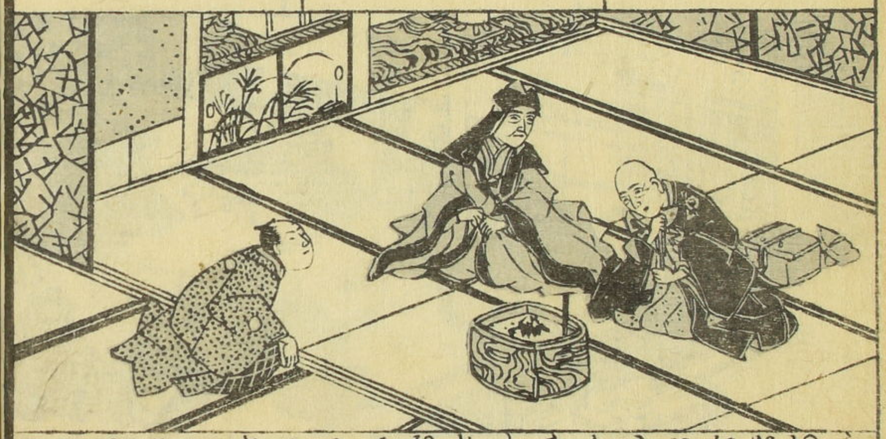
歌人のうさよみきゝう花らくきくん　卜宅

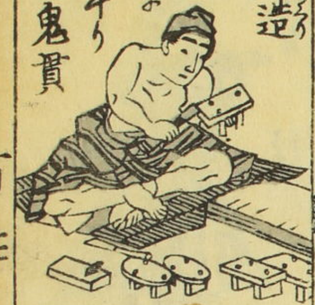


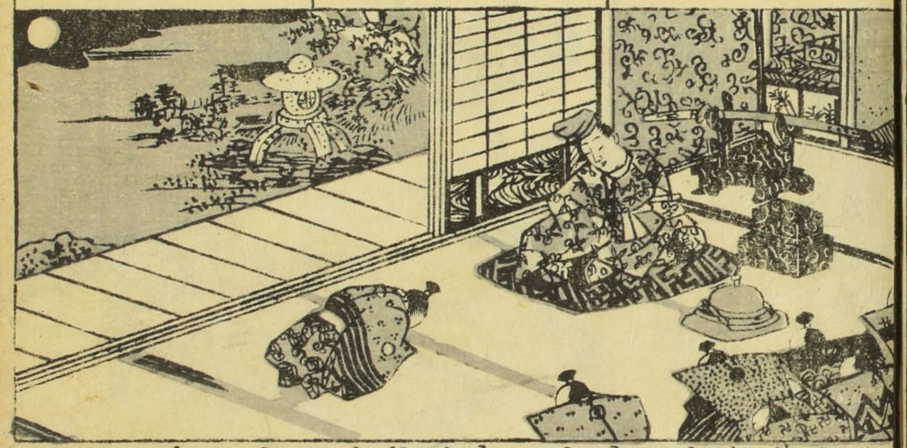
扇折（あふぎおり）

岩木をゑる結くつるの扇のかくく　吉原

両乞の仕方さまざまありし唐士
にくは小蛇二匹を壺に入りうつり
枝をとり壺の外を打て唄ひ舞
といひ伝ふ野々宮利にては小町
の哥の数一しさて田唄をうたひ
盤珪（ばんけい）禅師白唄をうたせ近世
まては其角が三めぐりの雨乞名高
く世にはやりれど又正徳三年のころ
四国にては一せつ雨ふらず作物
枯果るんとするを見て讃岐の新吉なる
ものが天神の社にて雨乞の俳諧
興行ありしが百花が発句に
神風の雨ともなつて嬉しの衆
これより次第に月句ありて百
韻に満る時雨ふり出し二日二
夜ふりつゞきて近在のうる
ほひとなり民の悦ひをなさしめ
されバあまねく其徳を知らし
けるとかや

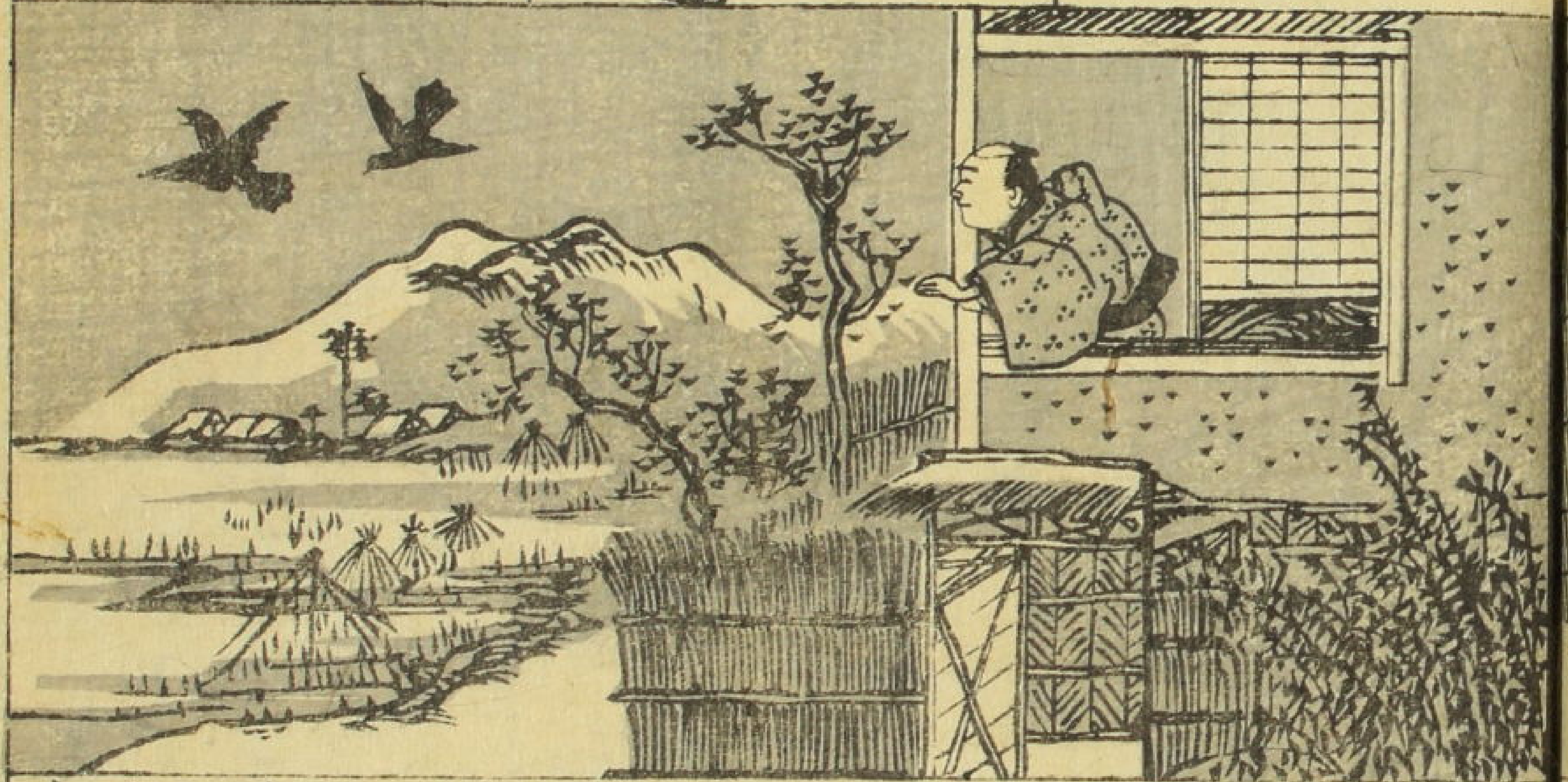


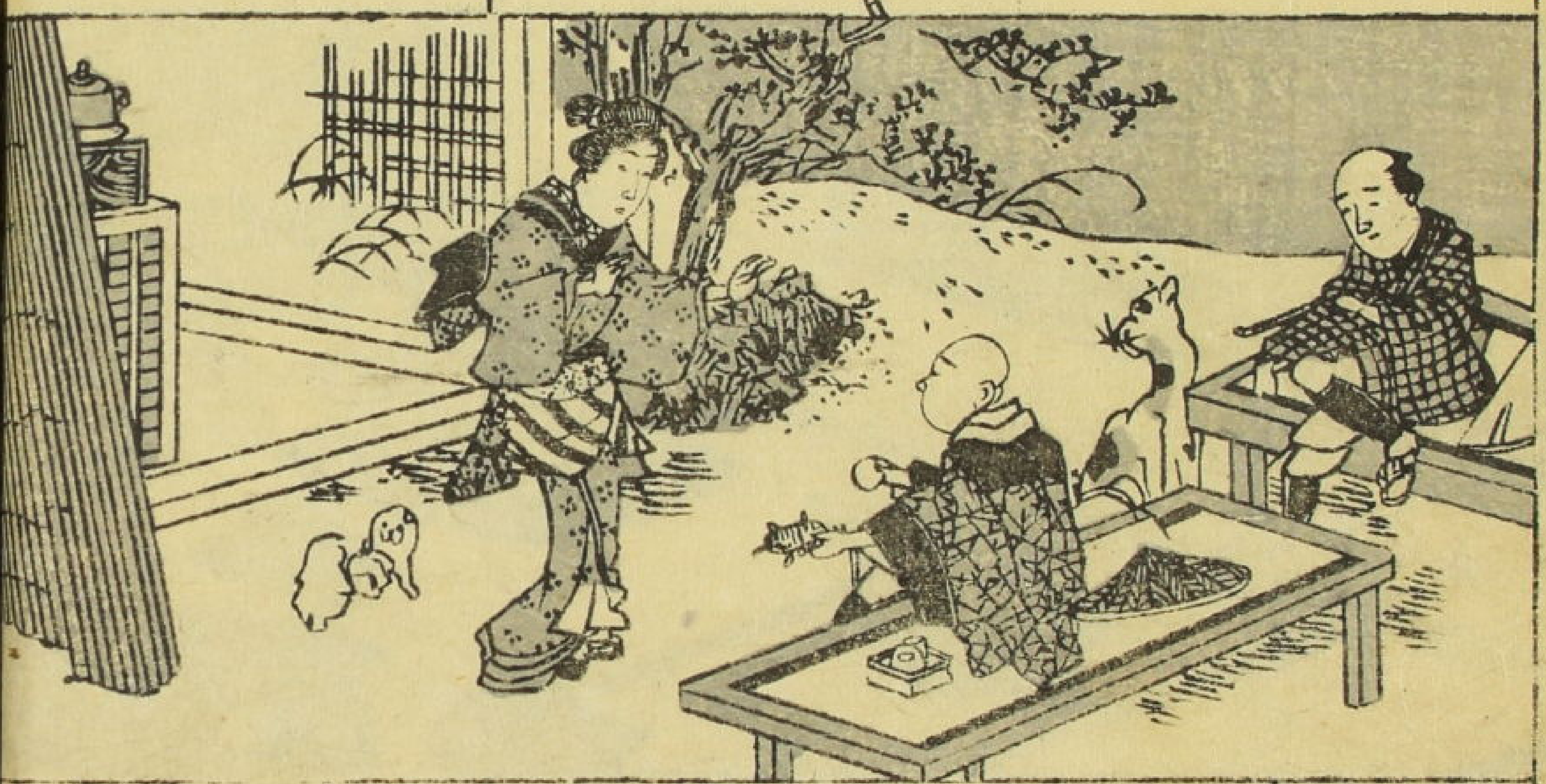




有縁のてづめ春かとこれつるや
いつこゝろをさそう芭蕉翁の旅
枕ひせーみ木白堂桃隣門人ともに
いつをや伴ひて江の路より指合こゝを日
いや増の歌よ宿るに旅店の女房
さへ夜寒不二を隣めるに雪うち
まぐき数到若しあごもいかぐ春
の粕てみるー南角をひさめ二人の
ものを忘れと云ひ安達の袴をこゝふ
桃隣ゆくいと寒気とうりこと西
谷のこゝをこゝをこゝろが早速な
平泉あり時こゝ真三堅えわぐれ
如月六を九絆こゝ花そのがこ翁よ
ーぎふあひ伯をおーと問ふ桃隣
とこゝこゝ
とく出てよしみをよ花の兄
翁これをはく伯へ道を約ひ
かーこれ去うりとをこゝるうん
ーんせーこゝや

右関秀吉る楽ふ川の
寛ありて例る号郎ふれよぶ
まそ繁約のごく変化ある成
汝るふとるー意へあろーく裏る
そりひてうんよさ有らば裏る武
刀そこれとあれば号呂剣考へく
式るあるものヒゞくい保作をこう
四度発上をるこのと安ーこと
かられが起ぐ汝我をのこう
よう中義へよそつよと四度ふ下
すまのふ号呂剣振をかつて大谷
笑ひきこうばりをかりりこのの
大関をこうにるみまこと
ふいのとうく伯度ふりまこと
こと笑ひられが大のふ感ーみかれ
ぐうあしのつきよさそ裏自ふ
うにとのこまひられば
孫自やさんで夜中のて堂三見
約今ーれがばきんとうー名作
の刀をうーーもれし

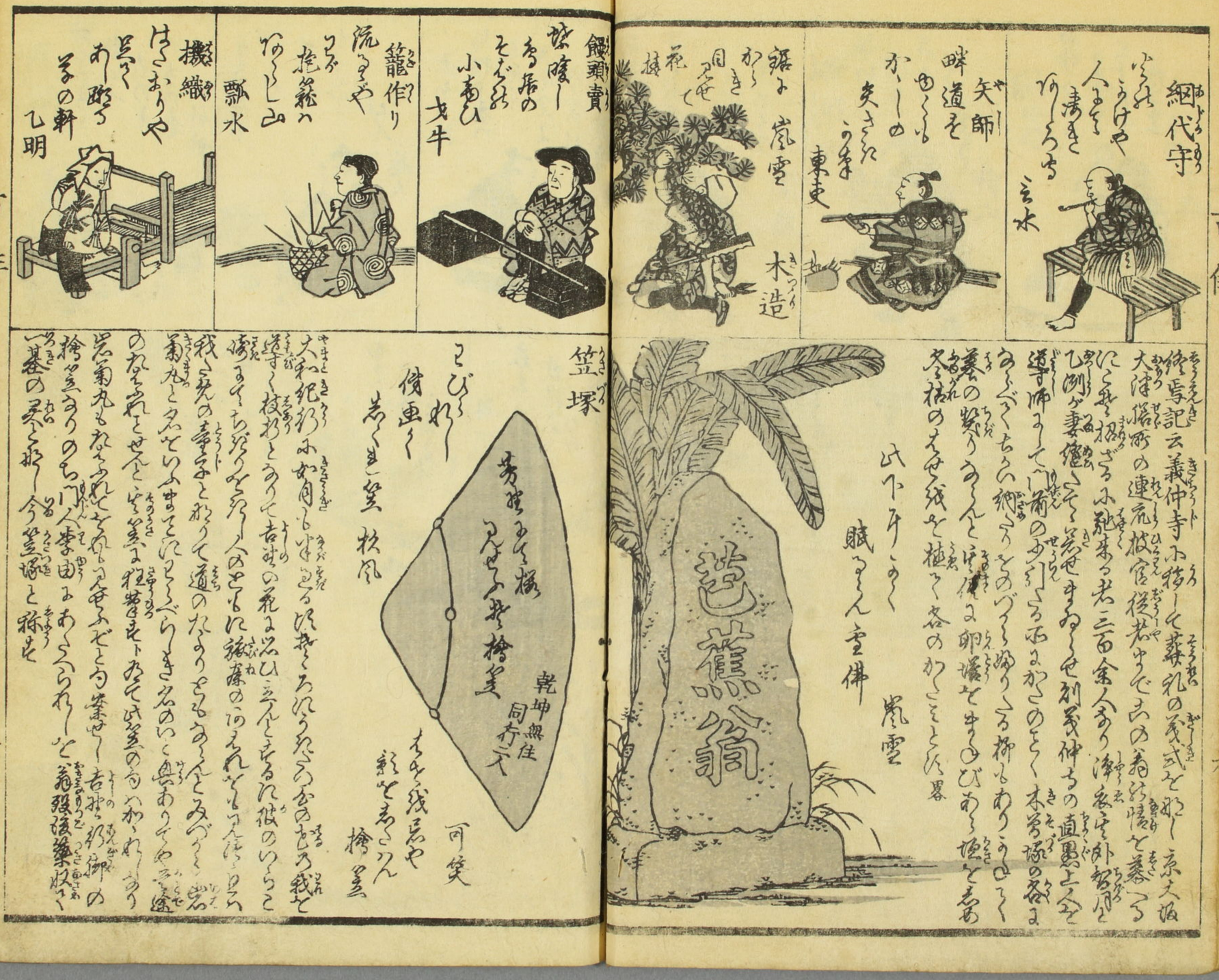




文政二三年の頃北圃[illegible]の比茶[illegible]
茶屋の[illegible]
[illegible]

俳諧午心は室町の旧跡[illegible]文雅の人に相[illegible]
[illegible]庵の[illegible]隠栖を好みて移りて住ける庵の[illegible]心をなぐさむるに[illegible]
[illegible]

[illegible]ふしぎのえんなり



終焉記云義仲寺に移して葬礼の儀式を始し京大坂大津俗所の連荒披官従者まで此の着行情を慕へる にて其招ざるに馳来る者二百余人あり浄衣堂外智月と乙洲が妻繼ぎて若せまゐらせ別義仲寺の直愚上人を導師にして門前の少引ゆる所にかたのごとく木曽塚の各に墓の契りあるとて嫁りたる柳もありこれにて冬枯のたせ残を植て各のかたことに畧

此下にあく

賦るべん重佛

嵐雪

芭蕉翁

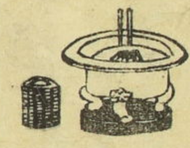
華結
ぬぐへよく
泡ぐもり
のりの
四方の春
竹妓

きさらぎ
撫子や
菫
かきつば
うつむら
越人

ふみ折
烏帽子ゑぼ
ふりかけ
きそえよ
けふの月
其角

薄雲
初雪や
ちらちらも
ふるも夜半
イクノ
宮路

そよ
ふきて
くぐり
炭火かな
三クニ



すゞ川
一夜
とまりや
うそ冷を
奥州

あら
我ぜで
ふ
やとぎ

若糸
雪の
ほの明
ほとゝぎす
水鏡かな

染之助
ちかぢか
夏の菜

十二
松山

瀬川
夕だちや
うその
やうなる
日の初め

寛政八年辰の年内宮の神官蔦屋長次中川平太夫このふね秋更ゆく一世の中旬旬なりみさをつけ通ふとも世にこれと伊勢物語と称せし人千句の発句

秋はやかうく　神の春
其成の秋もも能狂言
一夜の花見も半ば女の花見も備
風流ふかしてあらう一句ひねくさ
あらうくめでたやと世の好士の
おしへうなり附句の体い

花をおるかのちこちらうけ四つ供
竹ようい花つれをき徳のう
手向ばかりこあやまる物のん
なりうなんとやく

右花枝みつからとれいの胡蝶か
粉子れおもごぎ香のうやうの筆
天文十八年八月八日年六十七紫

荒木田守武
春の日や
もゝ
岸の
ふね
この
苗

心敬僧都ハ比叡山住心院住職ニ
ある時北野連歌の会ニ
人をおくりてかへる野のまへ
身ハいつか煙りの為ニのこるしん
かく附られしを天満宮ハ感ゆりて
手ニ葉の大事立水の巻ヲ浪
の巻ニを授けなひしとこそされバ
後梵灯庵ニ僧都の御とゞを立
て煙りの宮といふ
もえてそのふよみどりそふいろ
とぶ旅の御まさ斗ニ風ゴヘて
石の上ニも世をぞいとへる
乱世ニ無ニコゞいき死の有をさて
發句のさ夜一ゝと優なり
きれかえしむかなるなく鶴ニ
花ニ入ぬ夕ぐれ深き夜葉葉
柳ちりかゝる雪ニ夕へ
月ニこひ月ニ思ふ都かれ
太神宮法東千句ニ
日のミうげ花ニ見るゆゝ葉

心敬僧都
ちる花の
青
きく
ほと乃
みゆ雨
このな

宗祇ハ紀氏の産ニて雅より風
月を友とし位の河の旧流を汲堵
國を拓歴して雲名四海ニなるあ
る秋名月のくもりなるニ
一とせの月を愚ニ今宵ガ
又のとし名月の晴なるニ
一とせの月をくもらせこよひ
同じ詞ニても心の用ひ分ゝ極別の
のあり又播磨の五ニて堂の再
建ニ入るゝ事しの連歌催しあり
宗祇ハ其ニ和ニ以下ハ都ニ
いん西連歌のんなあらん紙を粗ひて
「あさらしく造り立てる茅の堂ガ
とき」を懐紙ニかく一座ゑんじ
て以初心と思ひて宗祇
のみ光る法西の志ニ
一座宗の名ニ及をとゞむるゆへ上ニ
ニ二字の余りありけニ
いひて退く文亀二年八十二ニて
歿せしと早雲さるニ葬せ

宗祇法師
世ニ
ふるハ
さ
らけ
同旬乃
ゆどり
このれ

宗長ハ駿河の國の産にて幼少より
文学の道あるハ今川義忠公を
頼して仕ふ十八才の時宗祇に連歌
を學ふ一を宗十ととる出家して
紫野に參禅し宗祇没してのち
花の本宗匠なるべしと定められしが
辭して受ず。やがて勅定ありて
其跡をつぐべしと仰下さる風雅の譽
ん大徳寺建立に其功あり庵を立る
に定家卿の自筆の源氏物語を
買得して寄附せし甚深志を賞
して今川家より新田丹後守安
元に命じて泉谷の地に居を築
かしめ泉水築山四時のながめを
盡して遣はしぬ宗長軒と号す
今の柴屋なるこれなり老に及へ八を
ゆくことを楽しみ連歌名誉の
人なり享禄五年三月八十五にて
寂せ

肖柏ハ具平親王の遠孫にして早く
俗塵を出て老を好み五岳に登り
詩を綴し和哥ハ宗祇に学び其
出る時ハ牛にのる角に金箔をおく
見るもの怪と笑へども自ら楽しめり
其後摂州に住する摂州池田に庵
四時の花を流水に植ることを好む
世へに牡丹花の名あり永正七年の秋
帝牡丹花を夢みて叡感ありて
に命じて肖柏を便殿に召して
御連歌あり夢庵といふも是より
の名なり一とせ文月の晦日でりして
民の苦むを見て是をあはれみ
空にあるや雨をのぞむ秋のくも
かく吟じてまもなく雨ふり出し田畑
を潤せしも幽かく斉に後園の田を
実し郷に其南が句をのせ嘱まで
肖柏の高名を云ざるハ無き者あり
となり大永七年四月八日に卒ス
八十五歳

宗鑑は近江源氏佐々木義清が末孫にて支那弥三郎と号し足利義高公に奉仕し将軍薨じてより利髪して山田薪の寺に至て禅法を悟道し始メ連歌に心をゆゑ称しなど宗祇の上に立んことを難きこと見極め俳諧の句を立つ事に逍遥院殿へ乗るある時に物語に蓄より何人の歌にても上の句を吟じ只一句にて法々下の句あり

とぞいふ事はむかしありけり

是を下に付まば何ゆゑの上の句にも付んと宣へば宗鑑すべて夫は上下の句ことなり我々これ無し如考なれ

これにつけてもかみの有しさよ

是何の上の句にも相頼いたるとかなり

手をついて取ずとる蛙が

此時の句ありといふ天文八年

元朝の

見るものはなん

富士

乃山

山崎宗鑑

僧上寺音巻上人は智道兼備の高僧ありあるとき人扇を出して何にても手跡を頼ひけるに筆をとりて開けば三角三界を表しこゝめば一木一心を示せと前書し「あふくよりの句をなりけりあまた徳を慕ふ者多くある時大流に向ひて我今日遷化せるなり疑ふことなかれ皆迷に出て快をなるべしと法のんを寄ひ既に時いたるとて

宿々天地清濁色

五妙境界浄刹臺

三悪火坑阿鼻底

一機不轉古今叓

斯頌を書筆を投山門に出宣を拈けば炎然たる火車雲中に現れ其後上人のり移り大流にむかひ火宅にはいまでもやいでし火車ののり得てまたはしらずしらずとそかく吟じて飛さりなんといふ

音巻上人

あふぐより

那に

のり

扇この事

松永貞徳ハ逍遥軒と号し、また長頭丸とのふ和歌を総称法印に学び長嘯子を友とせ高弁に志て儒僧に名誉を得連歌俳諧の二物分て俳諧花の本の称免許せらるゝ人華を携ゝ十体の書を編ゝ附合の式を定む長短の素形を左に紀ス

今宵しことも山にとまらぬ
月静なる秋半の山風
飛見なるべき稀秀もなし
其名ふをも花と無ふる山ぬ
人と我との秋ふらつあり
萩原や隣も風の夕部まで
孕めるのにも秋れかゝあり
尾花さく水辺を兎の月をて
氷と見しもつる花なりけり
池をれ汀に聖寿の雨を受て
八十ふ光を秉燭二年十月五日卒ス

徳元ハ彼阜にありて織田信秀に仕へ称義弁宮利起といへり慶長五年の役に依して後武門を通れ剃髪志て帆亭徳元と号し和歌の指南をすし江戸にも居し俳を貞徳に学びて世に知らるゝ其比の附合

夏のきれさらんさ雪ん時を　徳元
あをらの花のまゝ待友　慶長
きれぬるも庭の垣根の帰途て　玄札

此人の風格一度別にして
何とみてもつ雪わど思ふ物なし
やまとをしも重ともいはし弱きなり
獨吟千句をなし名誉をあらはしものち名誉に漢に住し又丹後に移り正保四年八十九にて死て辞世
今までハ生きてこそ我月秋が
法名清慶院端尹隣山と
号し天のまゝ立五星山
智恩寺に
葬せ

里村昌琢は連歌に名をなく雲上
へし度々召出し人にある舎に
おちゆくかはのゆく人をしられぞ
行の子はのとより御のあらまれてト
此つけまた常妙なりと世にこれ傳人
まとある舎に
風もおくまは面もらふれ
とおしなへちらぬ花こそめてこれト
附たりれば人なんじてこれは
ふしぎなり何日のむのさなりやと
いふに昌琢答て貴方の係も我係も
同じことなれど此処遠ひあり只人
同花の花斗にてあるゆへ散せし
我は只ことぞの花をみるなにちらぬ
心の花ことぞの花ひづれも古歌に例
ありいにしへの歌句に
おしあどのちるのこゝろなりけり
いつもみる心の花にまとりなひてト
宗祇の付たることなりといひければ
昌程は昌琢の息男にて連歌にそ
の名をなし此白露のゐ赤壁の賊
に白露に横たはり水光ッて天
に接ると書し露の横たはる詞
ちらしく是を見て柳の枝につくり
こゝろは他妙なといへりある舎に
いづくの山にかくれ住らん
此付句に昌程
郊のむの咲ども名なるぬ時を
是をもつて一座感じ既に執筆も
懐紙にかゝんとせし我父昌琢歩て
まちつと案じてみよゆゑ云ひけり
人々如何のことにや此頃の秀逸に
とひ人ぞ昌琢うぶりをふりて定まらず
昌程者ぞし考へて又郊のむのと五
文字を執筆につくれ昌琢失ぐ
こそよけれとぞいひけり
郊の花の数をどもなるぬ時を
さきたが昌琢二の句をつゐてこそと
いふ父とひ子とひ此道の名人ト云ス

玄札ハ何勢山田より出て医師を業とし俳諧ハ貞徳の門に入り後一派をなす生質かゝる地にして世事に疎くりつぱら云うけのことを好く徳元変友など同時の人に

探幽が富士の贊に

客をかしやさなぐら富士を雪隠

四十二業の妻

守りなくてしいやしし十二神

番のあらだれくさのらん雪の花

ある時癰を炊ひさらに茶の鶏も

なりしに医家にあて獨吟百句に

卯の花のおちるハ風のおとりだ

いさ黒焼にせんなときに

此吟雪の行情となりしにや

癰こちまち

薩て底苦をのがれしハ

風流の一徳いちぢるしと

そこゝろ世こぞつて

高島言札
咲をれ
のほど
発で
あれ
りのね
那し

秀吟ハ江戸北村の産之拾穂軒と号し國学に長ぜり関東に召れ食録若干なり名誉を海内にならす

万葉抄八代集抄枕草紙春曙抄源氏湖月抄をはしめ注解をくはゝる書物五十余部に及ぶ俳諧ハ貞徳の門より出るといへども

まこと一種の雅韻なり

富士の山師走ともなき姿かな

一僕とぞりくあつく花見かな

夏を祝ふて

復にけさ生るとなるしか門の松

名変

地を加ふれ木の雪れ花の都かな

信章江戸なくるに

いやうんせじ富士をすべて同日技の雪

表傷

ひさぬをそらさめくと申候しぞれ

八十五歳にて宝永二年六月十日

辛酉池のそこに此歳なるに葬せ

拾穂軒季吟
夜度と
こゝろ
ひく
祝ね
なるだ
この那

湖春ハ季吟の息男にて父の職を紹で歌学所となる俳諧ハ父翁にまさり風調雅情あり桃青父のあとへ志ばく来りて俳諧に及ぶ季吟真徳より法さきたりしに父秘説の書を桃青にあたへ拘語り数刻に及ぶ時俄に迅風窓を打たる折うら

あらつちの咄しとぎるゝ時雨が
發句雅を流に傷れて述懐に
うゝ炭の崩れうゝ身のなるゝ
名の附ぬ所うゝ西し空さくら
さつうや蓮に見られてゐる心
日ころ氣の附ぬ松あり楊柳花
牡丹さくゝもや花見とさくら
深かろしはゝきる拘一ツ
ゆく年よ京へとゞまゝ帰一ツ

元禄十年正月十五日父に八年先立て殁ス五十四花果院と号し

山岡元隣ハ花洛の医家にて俳諧を季吟の門に入り和学に及るゝして徒然草後撰増補を著し長明方丈記既書など書き俳書を数多上梓して惜哉強記の人なり中にも宝蔵といふ書ハ侍歌を以て調度の数文を作り雅に志て名家し

傘

天にはるかしうさもうな花の面
あひはさしく
金持や粉面白し月と花
紙
ちハ灰やことものは花の花畑
十番盤
義用ハ志ぐぬうはなぞ老の数
たらぬ
月のうれあらふ鹽こうそらの海
持仏
終にもく道つきなれやくらり月

岡田将監は英清大塩の土なり
此人左文右武の覚え多く此
に和歌を好こと上一等道をこ
ゞれ古人の詞意を机上にならべ
和漢の殊を捨ひその光をあき
らめ人も知り世にも個に知りの
能事なりある夏都にのぞり
近湧殿へ出見舞に出るまゝ
五月雨によくこそきこれなのもの
あそそしれは将監
あのへとのへをさがそ将きひ
猊をつけて中上るれどとの外に宗
に叶ひ出祝たきあるどなりおもひ
がけなれ幸ひにあひ暮れをとりは
風雅の徳なりなり又行所を泊て
世の雅詩を賞く俳偕獨吟に
爪紅をさそや桐の初紅葉
尾花の風に帰り袖の庭
月秋には踊きと人を催して

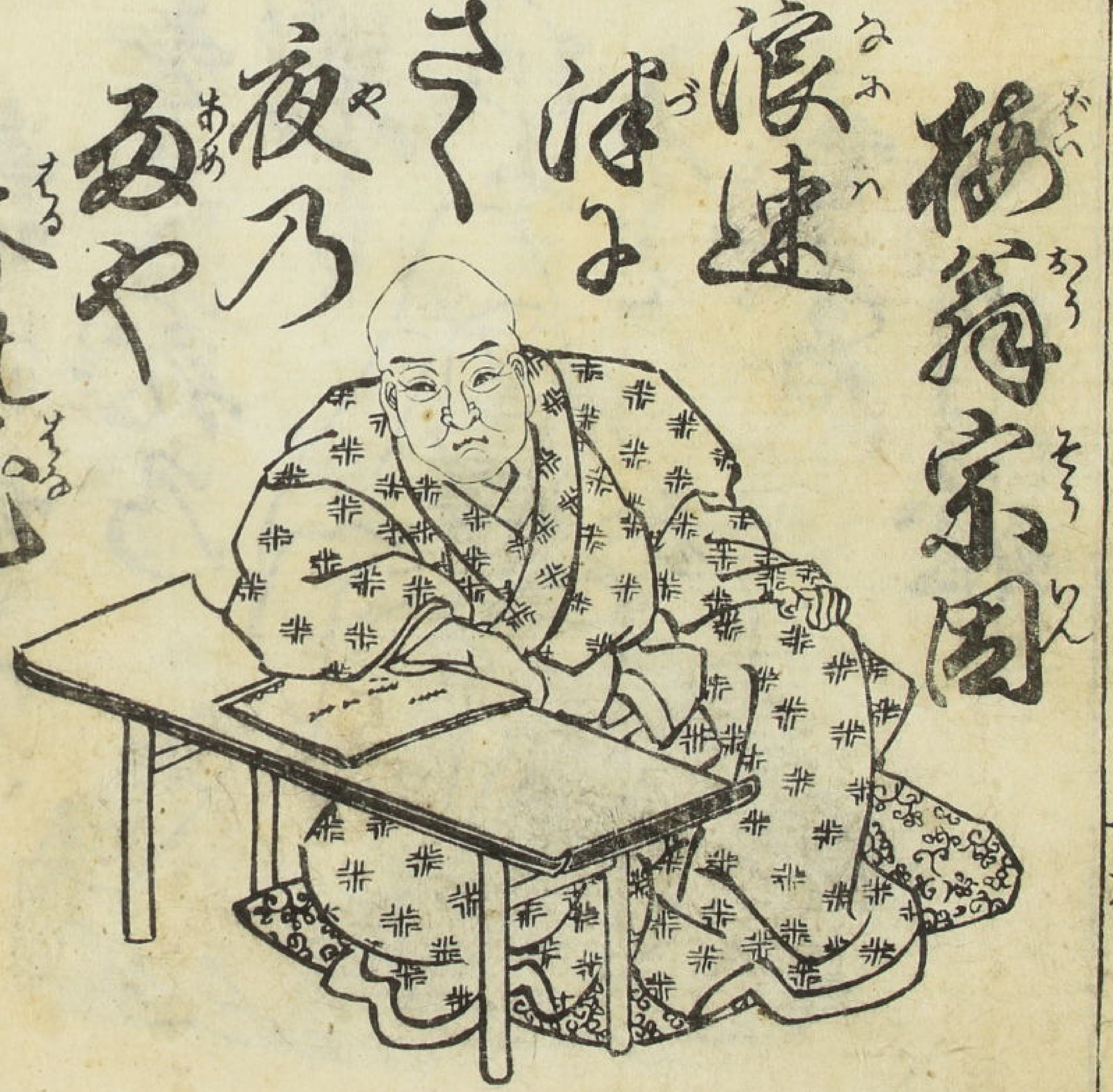
松田句書堂一は作勢山田平
任て名誉の盲人なり雅情深
く考に十二律の調子を学て物の
善悪を智術を得たりある時他の
家にはたり門の比優を杖にて突き
音の怪しきを悟り入らぬ志て帰れり
その家に病狂人ありて口論の上夏傷
に及びしとありし実に入らぬ盲
人の善かゝん此難を遁れしもまた
奇といふべし俳偕は守武家鑑の
風を志たひ幽妙をあらはせ
天神茅納の独吟
梅なりは南の枝や北野殿
とぶ鶯のあとを老まつ
長栄なる光りに鶴の羽を伸て
月にあたりをさらふ寄窓
秋風の次にくりたる古そぞれ
俳人三津安その女など此門より
出堂一八十三歳にて
寛永七年卒

松田望一
をく花乃
見れ
何に
あど
色香
可羅

梅翁宗因ハ西山豊一とて肥後
八代ニ住せしが加藤家の士にありて
のち武門を遁世身を雲水の行方
に任せ心を花月の條にとゞめ一段
俳スニ寓居し又浪華ニ赴ぶ
又難波天満に移り正保のとじめ
宗匠の席に陞る住所をめとし
俳諧の名はひろるにや西翁梅翁の
詞をひらき北窓に雲の力をそへ
て世にしらぬ人なく武陽にあり
俳諧の談林をひらき桑盛に
しくやどもうつし人も此門に入るあ
夏東山より大坂へ帰るとぞ

葉山や或ハ称にうき俳え船
夜の杖やあつま吟し五月ハ西
あるらしの春に
くれ安しとんなよるは百とせも
その一枚昭て元日
立安しとんなよるは百とせも

田代松意ハ江戸神田の産なり
宗因を招き友と升ひて始て江戸
談林を立発句と号しそのにはひ
変化の余情流行の体を顕て
宗人をまげまし俳書数多著し
談林百韻をそろへ一字の働き
一句の情てまやうに教へれば世
間皆談林風せぬ人なくなりし
されハ実に談林の本行の元　宗因
世誇ねるをさすや當　雪柴
花霜さきこの燈りよとされて　在色
露ちる室の連る旅の山風　一鉄
語むまく旅穢つゞく旅の雲　正友
此ところ江戸にて此談林風をひろめ
らるゝハ此松意と伴野の正友ぞ
二人して力をあはせ
宗人に道をさとし
東行の功を初めて受ぬ
雑情強く名をなしるあり
『入相の子や流けぬ花もうき



重頼ハ荒涼の人俗称大文字屋
治左衛門後ニ維舟と号ス貞門の
俳諧にて其名を人に志られ沢翁堂
号し後法橋に叙ス毛吹草太子集
を撰ス諸様の比まで長丈を句集
今招姿を忘ふみ生奨跋扈き性
にて同ハ人の人々と俳を楽し交り
を断るゆゑなり其風格

荒に行心や鶯籠に相の様
秋やけさ一と足に志るぬぐひ極
岑入や雲に紀伝ス所中あり
料理あり銭に多し旅も宜し
順礼の様なりゆく友ならず
ひぐんとて慈悲に折せる荒もか

其傍に曲きて

木綿帆やあらこし船も雲の峯
阿蘭陀の文字が横とか天津原

重頼七十四歳にて延宝八年
六月廿九日に歿せ

来山ハ泉州堺の産にて書を能
一を学て十を志るの器にて其才の人々
十萬堂と号して達吟にして
中葉諸様の翰楚ニ不可女人形を
楽して我座右に置き紀左ニ紀ス

西行法師に銀猫をなぐるに門前の
童子におくれ通りしとかやいそぐこそ
あらぬ我は道にてやれ物の人形にあひ懐に志て家に返り其ハ
机下に居て眼に悦びよハ枕上に休せて寝覚の仏と世をすれば
画本の達摩などに紙楽て科もなれ身を白眼にめるよりハ逢
にましてんや物いたぞ笑ねるかりに後立ぐ悟氣せば蚤蚊の痛
を覚へぬいつまでも居住居を嵩さぐるに待ふんとの人生ひ
涙を吞ぬ人うけ是ご淋しげに物くるぬハよし自然のぬふ後ハ
るゆゑ四時同じ夜裳なれと暑雪を志ふぬハ代方三年のたるさきに
に逐夏ハむかふに凍しく極るにんよく冬ハ燒の元をゆるさ後ハよ
かげんにあさうえ女の石に坐まりしゆゑを名ハ石が女に化せまじ物
にもあらぬ千とせをふとも変せまじ知るこち風老がなりぬ
の翁後家さりとも氣を出し舅ハいづくの大ユそや土屋狀
志ふぐあるうけるのいかせ物がこりや
れるすもる根のもとや見るこだりり　来山

ト養ハ泉州堺の産にて牡丹花
肖柏の末なり始俳諧に拙びて
慶友と号し医業に名誉掲ゲ
人尊敬せ堺北の庄にありしころ
いにしへ花女池獄の住し高須と
いふも変なれバト養狂哥に
南北のこなるどもがとるゝハ
たゞ一ものたらせなりけり
又信よしに指で
せみよしの木の葉の月の片なれハ
ありけるものを実にそりけし
晩年 台命によりて東都に
召れ官録を賜りて狭地洲に
屋敷地を頂領せされバ狂哥に
ト養ハ本道ところそ思ひしに
ゝ三地をとるハ外科にこそあれ
ト養和学に通じ歌俳諧ともに
長吟に妙あれバ柏子ト養とぞ
唱へり後法眼に昇進して
延宝七年七十七歳にて殁せ

牛井ト養
鶴倉や
六乃
まる
法ぶの
青山椒

西鶴ハ家周の門下にして大坂
鶴林の一人なり住吉社頭におゐて
獨吟二万二千句を吐実より世に
二万堂二万翁と称せられ又松寿軒
ともいふ此人国学に秀で文章妙
を以戯作に一代男小夜嵐にをあ
らはし大に行はれ浄留理の作者
近松門左衛門も此門より出るとなん
万句興行の時法国より俳諧
来りて西鶴が老年をゝめしゝ家
上手の云葉人情をはらぬ鶴林
の一風を示せバ賞賛して門下に
入る者多し調骨も一きハ目立て
平ぐるやうなく生るゝ花見酒
鯛ハ花ハ見ぬ里もなりけるの月
出持に寒かくれ行衣ぶく
元禄六年八月十五日五十二歳にて
卒し雅波八丁目拡頼寺に葬せ

井原西鶴
大晦日
きだめ
なれ
世乃
さるゐ花
この南

大淀三千風八伊勢射和の者にて十五歳より俳道にこころざし日本行脚して年月をへ国々の風俗を感じ郷の俤変化するを愉しみ友を結びて附合の興を催し又風景眺望を探り旅中の紀行を著はまうせて数巻懐日記横折紙六百余枚に及ぶ後延宝の初年行脚文集とのふ晩年桐川大淀の浜辺に移り圓位上人の跡を慕ひ西行庵を立かたはらに方丈の小堂ふれさせめ明ぢ二間の本堂を小堂ふれさせめ明ぢ二間の本堂を小堂ふれさせめ明ぢ二間の本堂を

三浦屋の高尾は歌俳ともに名人にて全
盛のころ人のかたる所之画もよくし夜の画
の自画自讃のさうつきあり
此情を云ふに[illegible]
[illegible]の客[illegible]て[illegible]
顔[illegible]とも英湯佳者をうけ[illegible]
尾をもこさに客あまたありしと
云しるは高尾[illegible]高尾[illegible]
京の吉野[illegible]高尾[illegible]面
白しと尾張[illegible]の吉野
[illegible]吉野も全盛なれい今
一度ありて[illegible]
あひて[illegible]
と尾張大坂[illegible]江戸
へ下し高尾[illegible]
又江戸へ下し[illegible]高尾[illegible]客は
さす[illegible]の客
伏猪の画[illegible]高尾は[illegible]せよと
あればむまそめ客と[illegible]
ねれまてにくされて[illegible]花

貞恕は越前敦賀の者にて重頼と
共に京に住て貞室の門人となる
又維舟の梅翁の檀林ふさ[illegible]称して
待まで人多くみせよ時鳥
いづれの里も卯の花ト
宗因附 又ある時のつけ合に
遠くは田うゑ今朝の旅人
といふ句は貞恕
道ぞ[illegible]の屋
と附てより仮名を大津の馬のくそと
呼れ逢坂山に俳諧をかまへ数十人
の俳諧を集め法国行脚を催す
其[illegible]貞室の門人
多しといへども跡をもづるべき器臣
其るに氏人得る所ありと見の
本をよび[illegible]こそ風
雅の本[illegible]といふべし
[illegible]
七十歳にて及び元禄十五年三月四日
殁し上京寶相寺に葬ス

惟中へ備前の産さしめ岡西
有又用く堂ともいひ伊勢の電一ふ
俳諧をまなび絵書にして和哥も
よくし沙金草紙續世名被を書あ
らはし家周とも交り学くあることは
土佐の信實が画し人丸の作影をも
とめて家周の許にわたり書しかれば
夫にそへて家周前がれをして

学窓伝作のため
影向ありけるなるべん

山筆の光明のくと窓の堂とい
家周も頌るあめたる人之る体
上元や松にしめて真の月
とくちりて見る人々せ山ざくら
とりとめぬ風もなんなり 雅氷
帯ぬるしいまだ旅なる衣ぶべ

除夜に
鬼をも人網公時に方相氏
五十四歳にて元禄五年
八月十日没せ

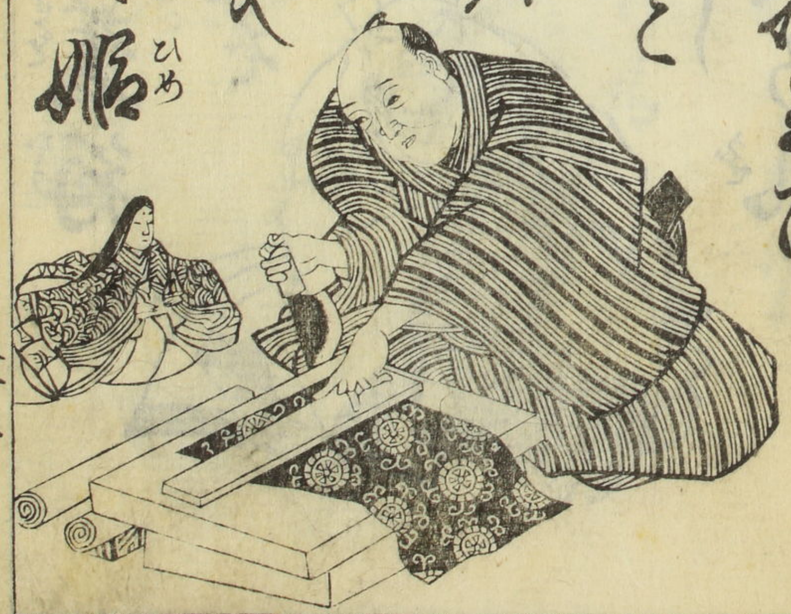
野々口立甫ハ俗称雛屋市兵衛
和歌をもよくし尊朝親王の書
法をうけ画もよくかれ京臺といふ
自画を用ひたまひ草を著して
鳥丸家の作跋をたひ此本雛士は
力草となる蕉父の追号の時獨吟
九百吟を吟くと中に

雪と消しあとの光りや弥陀女来
手向ぬる花や九品の浮土経
花桶の銘

花といへばよし世我思ひ吉世といへば
其花の咲雪のおもひ出ぶるよいづれか
此名の本さへなるべん者されこのうる様
の種を植てよしの我妻の雪となりたん
とありそのいまれ老をがたし

八ゆるのゝるをな似せそ花の句
座にさへさぞな落葉ハ東山
辞世

月花の二句目を分ける世ふ
寛文九年七十一歳にる歿せ



翁は伊賀の産にて壯年に官を辭して
江戸に在び風雅を業として桃青と号
し深川に生家して芭蕉翁ゆゑ称せ
能道世に変化せることを慈式を定
め正風を發起して普く天下に弘め
和漢の学にあらず画い許古に学び
俳い許古を求ずとなし風流に一葉の
美人数をさらし文を書ること数編
吟は句集にあれど数老ましく生涯
行脚に杖を引て松島の曙の晴に
笑ひ象潟の雨の夕べに草鞋の紐
を歪し姨捨の月に露けた袖を絞り
富士古堂の名に對して吾に一字の他
あしと古をさらぐり世の中にうし紙に
志て山梔に心をさまし本草の色香
をもとめ百千の鳥の囀りよりひむしの
さらぬをあそれみ羅波津の浦に世を
見果元禄七年の初冬十二日五十一に
志て冥府の客となりて霊魂幾仲る

芭蕉翁
物いつぞ
唐さむし
秋乃風

東順は宝井其角が父に芭蕉翁の
書れし御に老人東順は板氏にして
其祖は江戸堅田の士竹氏と稱ひ
といふ者は晋子が母方によるものなり
ことし七十第二とせの秋の月をやめる
松の上にあらずして花鳥の情深を起し
ある思ひ浪の底の辺にまで神礼をしば
終に更科の事を発念として大案妙典の
産に隠る事なり河邊を学てつゐの
産として本夢何某公より建残を始て
金魚飯莖の愁ひなしされども世路
をいとひて名閑の衣を脱り枝を折て
業を捨既に六十年の始え市店を
山居にあへて乗しむ不乗を放さば
机をさらぬ二十とせあまりて寄事
の先さて車にこゆるゝがおとし
湖上に生まれて東野に終りをとる
ゆゑなり大隠市中の人なるべし

入る月の跡は机の四隅かな

仲下東順
とりしまぬ
ものや
年結れ

其角は東順の息にて榎本は母の
姪なり医家に産れて俳諧を業と
すゞぬ玉が池に住し後坂本丁に移
宝井晋子狂雷堂善哉庵の号
あり侍を大顛和尚に学び書を左
宝就画を英一蝶に伝へうけて多
能なりふ断酒をこしんで罹る事
なく隅田に雨乞の吟天下に名を
重ねし世に翁の羽翼と称して頗
る秀吟多し

恐ずに君に所望はなし 粉雪
次ナの浦にしろに何を呆るなる
いつしかに稲を干潔や大井川
夕立や家をめぐりて家鴨なく
源氏の画に
傘持ち月におくるゝ花ぐらぶ
宝山の渓
寄る恩に門の雪掃く乞食が
宝永四年二月廿九日四十七にて歿せ

二本後常行寺に葬る

隠士素堂は和漢の学にたけ
侍もよく是若さより俳諧吟の体に
抜て達人と呼れ江戸と吟の附今日
庵伝章とのひ西山八百韻に朱雲
といふは世代翁を友としてのち正風
体を得ことも文をよくし国学を好る
也へ白帆もまた高尚風雅なり

池に移るし仮名出なるふ柳が
茶の花や利休が目にハ吉野山
年もはやなかれ流しつゝそ死川
のみこしに西王あるぞ今の月もたよ

深川別荘に蓮池をあり友を集て
晋の恵遠が蓮社に比してより郷
社中といふも是より始まり蓮葉翁
同じ家集の風体を慕はれけ
其は追答に今の趣を催し
あはれさや時なるしの山家某
七十五にして享保二年八月十五日歿せ
感應寺中野寺院に葬る

嵐雪ハ淡路より出て後松倉の者
とかや其比江戸松倉の岸に嵐丁と
いふ小者あり此門に入て二十年あまりと
なげみる桑妙をあつかひいとさかなく
嵐丁死去せしのち其跡を継て嵐
雪と号し自立の風をたてる頃より芭
蕉の門に入りて名を揚られハ其角
嵐雪ハ両翼の左右の翅なりといへり
白軒雪中庵の号あり
里わる時人のさのまれて起きたる紙
を取よせひらき見しに其句の如の書る
が残すれハ消しかたきに紙に書付て
かの蚊帳の放ち猪人のかて死
出よりて急にやせて終に無よ
京の帳やかぬに籠る日をおきぬ
上京の時わらんべの声母に来る
ぬるめるく文義中なる翁の旨あまた
此ゆゑにかく眠らん空なきけ
宝永四年十月十三日死去五十四歳

其草ハ尾張犬山の者にて学問を好む
侍をよく彼の後母に孝ならず
小家を継ぎて母の在る人を右の
手の指に疵をつけ刀の柄を握り
と彼が良門を辞して禅門に入り
松本山上宗にまれ酒に清華まで
ぬく嵐なかりしと今山やなかの
雨く暁のねざめなりし哉
此ころの哉
山やなかの紙帳の中の巨燵
故の屋を出て其の佐の月
盛徳の其を一盃の銘に
花の露の小月のくまなきこのそ
見るものハ酒ハ宣十歌なるやそ
あとさきにて
笑ころて歌るのふきゆゑも
又雅の風中小切小窓所なるかる
うべくきる菜蒲の下の宇ころ風
のち三年閏寅去て外山のでは縁に
宝永元年二月廿日卒 又四十四才

去来は肥前の産にて向井は四郎
といふ都により蕉門に入嵐雪と
羽翼の俳人にて文に名あり 恒
に翁の詞にも滑陽に去来宵て
結西の俳諧を行なりといへり

落柿舎ノ制れ

一 我家の俳諧にあそぶべし
世の理窟を云べからず
一 雑魚様にはんぬあるべし
大いびれをうくべからず
一 朝夕うたく精進とおりふべし
魚鳥を忌にはあらず
一 もしやうに灰吹を拾置し
こそこをきらふにはあらず
一 隣からもし稽古待置し
火の用ふにはおよそれ

右々 孫々

去来五十三にして宝永元年
九月十日歿せ花落
直れ松堂に葬ス

玉棚の
奥
かつ
うし
やや
親の
顔
落柿舎告来

嵐蘭はある民家に仕へるゆゑ故
宵て仕へを辞して滑草に寓居し
蕉門の俳に拓ひ猶会に行き湯路
に病て死せ芭蕉翁聞て絲を絶る
令草を得としてあくてかゆま
ざるは士の志なり文質編なら
ざる我もて君子のいさかしとす
松倉嵐蘭は我を骨にして
實を揚にし老荘を魂にかけ
て風特を肺肝のうに拓そしむ
中略父のかく子のかく手のとく
異のかく年は云なれ向ひたる
俳の熱ひの狭にむきがく是て
拓も浮ぬべれだろりなり 弟我
取て思ひをのべんとすれば我つた
なくしたんとすれば拘ふたりて只
おしまつれにかりて夕部のくもに
むうふのを
秋風に折てかなりれ業の杖
元祿六年八月廿七日歿せ

松倉嵐蘭
小夜
志ぐ
也
隣へ
たいる
傘持音

浪化は京都東門跡の連枝にして
越中井波瑞泉寺の住職なり去来の
門に入一生の旨を白扇集といふ文に
名あり満呂といふ坊主の説を書述し
汝は満呂が汝が性のにぶきゆゑ餡を
研で小刀にし凡の波をむくがゆゑ
されば甘き物をもてむかば自然にむ
ける道理もあらん此田へに汝を書ふ
工は狐公が猿を養ふにことならば
茶を汲ませれば今の歌を汲あらし
幕をとれば春の日を掃ふらせれば
竹田が人形ならんにも土計の浪りは
あるにこそさるや汝が顔の漫々と
志て湯とも粥ともわかれざれば今にぶ顔を
絆となし生絆なるを用とせる実に於て
生成養ふといふべしとは東花坊に撰せ
ませて自慢の鼻やや花鉢印の事の
実りやすなる但満呂の二字をもて
汝が顔の百福を称せば汝が心はあまり
満呂なるべし

井波浪化
春待
や
机に
掃ふ
書れ
こぐち

東花坊支考
歌書
よりも
軍出
よ
悲し
吉野山

支考は美濃の産にて初め禅室に
入て寺の人なり俳諧に傍れて芭蕉
に祝し翁庵中にも終業をて酬そひ
志ゆゑ此れて次のごとく立さむさうの
翁歿後にも浪の双林寺に移阿西行
と並て碑をたて自銘を出せ
あつさ出さ　むさのまの　名にしあふ
世代華洛の　されにたつ　人にあらぬ
ありし世に　上のたいさ　者ありて
その五川の　こなかさの　名の人ぞ
汲てしまし　六せ五も　たてよきに
流まで　ぬう川や　此世を顔の
をきて来て　その法さむ　そのそぶに
いつ秋風の　やぶりけん　其後まりに
ときしをきぬ　来のうこと　人もいふね
身をなにたづの　たなときく　花れさこの
夏そさめぬる
みの一流を起し東花坊西花坊まで
梅花紅の称あり後ハ世田に住して俳書
亭に作る享保十六年二月十一日歿せ

計六ハ江戸の根の武士森川氏の
五老井とハ又蕙の佛とよし山氏の
別墅ふたゝび栞ぜ世事と
俗学の用侍きるし其世務をおそ
風雅を老せんとおもふ人のあり
人のあるをむやみ雅の落このむ風雅
人の為ともやせん画ハ菊も
ずこそ雅人の
ずこそ文を書こと元ふもく
きらうある人のよ入学の贄ふ
儒家何うゞ猫子洛ふ入て道を
学ぶべく曰りうこゝ機揮七年
のおこのふ飛ふて生ゝ高時ゞ
ふおて幅もそ乗り由比ゞ
本箱ふまづある掘のよ
發句の綿ハ安云の時のまうふ
かんきんの句歌の蓋うれ
山吹もとゝる田うくる

五老井許六

蕉の佛とよし山氏の別墅ふたゝび栞ぜ世事と俗学の用侍きるし其世務をおそ風雅を老せんとおもふ人のあり人のあるをむやみ雅の落このむ風雅人の為ともやせん画ハ菊もずこそ雅人のずこそ文を書こと元ふもくきらうある人のよ入学の贄ふ儒家何うゞ猫子洛ふ入て道を学ぶべく曰りうこゝ機揮七年のおこのふ飛ふて生ゝ高時ゞふおて幅もそ乗り由比ゞ本箱ふまづある掘のよ

發句の綿ハ安云の時のまうふかんきんの句歌の蓋うれ山吹もとゝる田うくる

掘女ハ丹波園掘原の里田氏の娘ゝ
幼きより風雅をこのみ六歳の時
雪の日や二の字ゝのゝ点の仮
俳を季の冬法年ふ栄ひ春ふけ
れば園の守人村の初ゝ
寿九を誉のひて

掘系ふれゝや拾をゝ歳の五
中年まで風雅ふ於ひて海浜ふよ
ふれをろゞゝめ時ゝの家を転ゝ
て日々ふ情家を去ひ一句ふゝ
ゝ風石のうちふ五を拾ひ旅中ふ
こゞろをゆるる心地ゝてろこひ後
舞をとろて男まをもち史記ゝて聞そ
ふゝひ盤桂禅師を師ゝて已ゝろ
奥州と号も其他遊のゝ
ひ終ふ掘孔子旅ひ寺の傍ふ
庵を仮ゝ宴ふ住て

さゝ雪女
栗の
猿
や
分る
数ゝ
女房
花

杜国の炎くるかゝふ糸桜
人もそゝもちるみゝう郎

鬼貫は拾貝伊丹の産俗称上鳴木越
右衛門桂花翁とのひ性を卒泉と呼し
始め俳を維舟に学び又宋周の門に入
先師松江翁と宋周列座の命に
一寸見る近きも遠し吉野山
といふ弟子に
徳にひさぐ紙さけてぶらぶく
軌筆よりの山に飄その田へあるやと
拾ひ出し鬼貫寄越せしが
よりの山花の盛りをさねとひて
ひさとこづさへ道こぐりゆく
といふ右衛門ありといひきり是偽なれ
ど蒼黒の刺刀のそこらく刻なり
後一家をなして獨吟句撰世に行ふ
家貧して資財とぼしく一女を娶候
の妻にもてむる人あるども義をもつて
志こがれ七十八歳にて元文二八月
二日終に伊丹吾隣寺に葬せ
筆とりて拾ちうらなや妻の面

伊丹鬼貫
骸骨の上を糀にて花見の邪

智月尼は江戸大津の乙州の母にて
俳諧を好き乙州とともに俳楚につぐ
なり芭蕉翁の門人なり乙州江戸へ
ある紙送るとて
つきとさへ人にも猿を富士の雲
まさ嵐蘭の死去せるをいたみて
呼出して来こかしかり稲さらめ
幾句のさまあまり強かれ宗情あり
号に手のとやすめん流しのと
木うじや色にもさんへ流ちりもせぬ
山様ちるやに川の水車
まつ妻や水に交るちりあくる
益のひる物るのよる知る事至が
海山の香呼こつる吹雲うれ
稲のむこれを俳のこゆげが
義徳愛の後義仲寺に集り種々
法事の事に心を附追居の為花
を備へ我老衰をうとちて
我なりもあれにみんゆる枯柴が
宝永三年七十四歳にて役

智月尼
山清ぢ海に見ふとや夕日こうげ

牛吉は二なき出里助といふの農家
久右ゑもの召をひの若ものいるご十四才の
時より人形狂言を好こゝろざし巻ものゝ
出るごとに牛吉狂おもく巻ものゝ
ふその笑をもとめ道の両の眸ものゝ名ものゝ
うち惟我のもの名ものゝを拝まれば
人も呼らばものゝを料りこゝを辺の老
せよび残うきまで咎てきこゝ牛
吉ふいあこゝ牛吉を人のものゝを
ものゝひかー　その里司ゝ村あそこの由へ
雌雉あって残ものゝも牛吉あるまゝ
ゑひきを人ふいこゝ名をもひ髪をかそ通
ん若こゝうゝ的心こゝ名をあくこゝむ
村のかこゝ人の屋を結び狭俗の
外他ゝのくゝ伝をこゝうゝて
で二十三年の杖里人のお指こゝれか
ば九月廿三日物故もべこゝとひて
その何のごとく病ゝくこゝそその日ふ
死也

辞世

浩瀚なの風ゆこゝうゝ乳ゝ
せこゝとよの小説ゝ出ゝ山雅ゝ
こそも女の姿ふい似ゝて
路ふゝくこゝうゝそこをすひふみせを
てゝうこゝうゝそこふおゝうゝふゝそゝ一すゝ風
のそゝうゝふみゝこゝ三ゝこゝゝんへ
家程酔てのこゝうゝ盃とゝ柄杓ゝ
さゝねゝんへの乱ゝまゝゝこゝゝゝふゝ
ぶんこゝゝ浩瀚風のみゝげふゝまゝ
風の私こゝうゝくゝきみゝうゝふゝうゝて
ゝふゝうゝまゝゝせんとゝんくゝうゝふ
風ゝもゝそゝうゝて雅こゝ辞をゝゝゝそゝ
妻くゝふゝきゝもたゝうゝいこゝのちゝぐゝぬ
うゝちこゝゝゝうゝくゝたゝん

あげくゝまてくゝうゝ死

瀬川

入れ

ひとの

いさみや

乃川

しかし坊は相州の産にて異風の道
人なり故佛道をよくしてまた乱舞
と味線にいたるまで上達してつまに
舞ひ佩ひて狩ひあるく紙業とも
暫渡逆にありといへども久しく
富士をのぞむ三紙不思ふおりひ
街道を小唄うたひてあり發狂法
悉院門前よりて富士をまたるから
辭世をよくして率せ

五戒のこと後を

殺生戒
いう夜との虫のいのち紙綿作り
邪婬戒
狐よふ老猫にくしやのらん
偸盗戒
拾ひ子なぬしなき風も糧のかな
妄語戒
ありたひのうち死世をしれ夫婦
飲酒戒
さしの葉の乱きやせしや雪の暮

しかし坊
声そぬ
おりひよ
麻乃袋角

百里は江戸小田原町の惠商人にあらず
仙風杉風は幻雅の友人初め芽風を
ひ三十六年一日も佛道に拾つぬ日
風雅も一つと雅あり
一ツある家も枯柴のへの字かれ
こかうち女の思ひかたつかり
佃舘に来て
雲のみまつ祈りよせよ土用波
宝永の来たらぬ火をもんと浮くし
に強立ち道の紀九五まで上下名木
旧次の舞弓舞
蜻蛉やをのと蓋にて五月闇
松並に橋を入る家次ナの夏
ある神やれちまちまれ君卒子
志らぬ火やまつ後の世に入る心
熊本にて佛友と変り目殺ひて浮ら
んとする門京より俗々来て儀別に
百里来て百里なく日も風ふかる
京に保土一年五月十一日六十二で死辭世
死てあれて涼しき月をたるぞ

うけ
がる
きを
身を
悦べ
やや
生みな
高野百里

琴風は難波の者なりしが江戸に来り
嵐雪門に於ひて親炙して其角に従ひ
文羅を学び一句を出し達者の名
を云り琴風百里と共に並べ称せら
る翁の奥の細道をうらやましく
思ひ享保八年二月松島の人と
旅行の催しせしに洗水公より
　汝が旅行の王年(?)にふきこと更
　まりて餞別のるちきらん
　つ旅の舟よりおれりろく
待そことよ出て松しまの花捨り
江戸紀紫大勢せんべつの中にその安
旅の外打出しましま称か
　百里も餞別に
みちのくや都まで帰れ道のるに
　冠里公せんべつ
うら旅程のま肩帰れのそゞるず
行琴風句集み奏し享保十二
年二月七日歿　神上楽(?)葬る辞世
一とのれにはあがりひぞ雲の水

秋色は小網町菓子屋の娘にて初
名をおあきといふ其角の門人也十三歳
の時上野の花見にまかりて清水
観音堂のうしろ井の端にありし
大般若の桜をよみて
　井のはたの桜あぶなし酒の酔
則ち此句を短冊にしるし枝に結びおきしが
輪王寺宮の御覧ありて其頃の宗匠
甲乙を律して定むるに秀
逸のよし梅がゝの筆より秋色と
世に云のけり又おもてに武家へ召され
内証奥の上秋色に縫とかせられ名を
　けふの紅葉にとりけり女なる
秋色は風雅に名高きのを号を深く
其実情世にすぐれ其角も多分秋色
方に宿し故に点印を預けし
之後秋色来て是といふ者の妻と成り
男女の子をもてり享保十年四月十九日
身まかりぬ辞世
　見し夢のさめても色の杜若

言水は花浦の慶雲れの門人にて
同下坐紫蓋軒とも号し[illegible]を
四方に糟も言水あるとにてこゝにしの
まてはありけりといふるうゝみて下の句
附かねて心いてゆゑにてはうぜんとして
是をいふせふにいひて狂人のことく[illegible]
うゝれありけしがある田舎にてうり[illegible]
[illegible]の声ありて蓑衣の窓涙しく[illegible]
[illegible]の美人[illegible]をなかべさし出し
[illegible]ありけるが言水とうしの[illegible]を
云てたゝぎむかりうゝふれ美人その下
の五文字は海の書とは中さはやはく
学へける言水又はよろこびおいたんと
せしが声さしてもとなし[illegible]中女の住居
へかんもいうと帰りて翌日[illegible]ねるに
其辺さしかに家なしかしれねど
[illegible]しのまては有りけり海の書
[illegible]人業して[illegible]の云水と
[illegible]享保四年九月廿四日死[illegible]
[illegible]部城のうてたゝらに[illegible]

池雨言水
大吼く
家
[illegible]
人[illegible]
[illegible]みぢ

千代は加賀松任の[illegible]のにて初めより
[illegible]ありて[illegible]を[illegible]
[illegible]を卑下して
[illegible]の[illegible]ちぎり
[illegible]に別れしは廿五歳の時なり
[illegible]の[illegible]
男子に家を[illegible]しあ尾となり別に
住て[illegible]も[illegible]明に学びて
妙なりある人画をとふ[illegible]を下に書て
[illegible]れと望しに[illegible]
[illegible]地にさくことはあぶなり
ある人[illegible]る女の[illegible]
一下かくあるも[illegible]
乙由[illegible]安[illegible]を尋[illegible]
[illegible]
千代[illegible]のうへしのもしに
[illegible]
永平寺の長老[illegible]千代が
[illegible]一会三千の心を[illegible]
千なりや蔓一ト筋の心より

千代女
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

能順は京都の社団にて連舟に達し名をるく元旦に大団へ召れて連歌の点をせしむ恋を御賞感ありて有あふ御硯をなつる時一けさ志るやの句を作るその後加賀大守の招きにあひて小松の梅松院に移りて住り折ふ芭蕉小郷行狩して此伝居に見られ出るに能順悦て日ならし雅俗数部に出よび能順翁に問ひて連歌のさゞひ同にかくもやとんるに

秋風は芒吹しくゆふへ風
秋風は芒うちちるタベ風

此二句を書て出せ翁もその博覧に付けがされれば

山さむし心の底や水の月

此句を出て出しれば能順さちまち奥意をさとり数日とゞめて能活に及ぶといへり

凡兆は加賀金沢の人都に出医を業とし風雅をこのみて蕉翁に志さゞひ猿蓑の撰に加ぞり其句作なのづから情あり

上ゆくと下くる雲や秋の空
砂よけや蜑のうへの冬木立
灰もてく白梅うるむ垣根が
ひとりうけて藻のむのぞく流が
禅寺の松の落葉や神無月

凡兆不運にして罪ある人と立り已もともに獄に法なれ牢内にて翌春いの志の首の法よさよ花の春うげろふの身にもゆるさぬ風うれ

那て身のあゝ立て縲絏の苦をのがれ生法くゞなれを人もよろこべ

冉葉の刺られなゞしも木芽外
かくるまざるひにあひしを面ぶせに思ひ

五月雨に家ふり捨てなめくゞり
かくよみもてく切清志れば
なりぬいとおしむべし人なり

枚風ハ江戸ニ田原町程屋ニ居て兄仙風と共ニ蕉翁の門ニ入り兄早く世を去れば枚風家を継て頗る富るといへども上氣の底にて耳少し遠し桃青江戸ニ来りてまた遠行の思ひある時枚風とゞめて世の俳を見破つて山林ニ入風せんと仕ふことむなれど蕉をとをざけ閑をへるハ市中にも山林なるゝんや山中にも俗蕉遠といへるゝ翁巻て吾もとより仙を学ぶの徒にあらぬされど市中ニ幽極ハいなるゝん枚風曰同ニ馳走を見ゝ耳ニ車馬の喧をまぬ可なるゝと伴ひて枚風の朝陸深川ニ至り宮ニ住志め是ハ芭蕉の名も起る枚風娘ひとりあて深く愛し

家柄ハ娘にまもちる妻戸ハ此娘先さ立て失ふしらべなげきて

いさよひや我身ニ志せと月の歓

八十余ニして享保十七年六月十三日歿ス

鯉屋枚風

屋床しく手のうごれやむ圓扇の子

越人

越智人ハ尾刀名古屋の人蕉門の英傑なりと沙汰も良時の吟詠は人のよふ立ちのなしと翁も愛ら出るとなん翁行脚の同道志て出立んとせしがいまだ愛着ニ引るゝところ有けん遠愛のさまを見へければ翁先家ニよらぬ旅立れば越人名どりをおしみ後悔して

うらぬまし思ひ切る時猫の恋

越人上京して法華八講の御寺ニ詣て女房の聴聞所とおぼへて御簾をたれ奥くらぬ不あり就女成佛の所にいたり思ひあへぬ鼻ろむ寺の志れば

はろ〳〵と落る涙やへびの玉

翁の歿後ち考ち師の愛想の侍なぐ〻妄言杜撰の書を生して世の人を敗けるを怒り不猫蛇といふ書をあらはし其罪を詳ニ無せり俳道ニ於ては実ニ

深切の人なり

生駒万子は加賀金沢の士にて世々
家富より翁の俳を慕ひて深
志を通せ翁北國行脚の加り金
沢へ立寄り亭宅を尋ねるに折志
も他行して遇ざるを悔ひひとり裸
馬に策を打て路を慕ひ漸く相
任にて追つき鐙別をわらまうまる
北枝秋の坊の貧しきを救ひ風流の
あるじと成て俳人を招ぎせめらり
江戸の許六を尋て對面をのぞむ
に許六癩癘を煩ひ屏風を隔
て人に逢ひ万子俳友と語らんに
いかで屏風をへだてんやと底麻にむか
ひて酒盛をなし終話数刻に及び身
乗ふんくたれど相まみへて虚
も忘れさるに風雅に愧く大丈夫
の人なり口調

清ぐみ帰尾上の松は明なり
岩路で一ト同くのさくらかな

生駒万子
媒たれ
やまる
七しい
菓屋
ふいのらく

曾良は本曾福島士河合勢五郎と
いひしが後浪人して甲子に住芭蕉
に遇て新しい様を慕ふある時翁を伴
ひ梅林にいたり終日奥をりよふし
梅白しきのふや鶴を盛まれし
など林和鶴の古るゆなどたもぶれて
招ぶに一ツの菓家ありこれ常に
菓をもて翁を入れは翁悦びて
るもに来て梅さへよその垣根が
と笑ひけるに男良もこれを見て
底む傍の座すく梅のさかりが
又流川に魚の多くを翁問ひけるに
流沫といふ魚ありといへば
男ひあり氷きへてハ流沫魚
曾良翁の行脚のともなりしが
道にてこびらひ別るゝとき
ゆきくてさふれ伏とも萩のむ
翁の殺後悲しみ墓に訪ふべく
鶴をうして初ひ終る行ぬべし
師を慕ふ人さしこれらにも志らる

曾良
春れ歩へ
雅とめ
たつ
潮乃
堂
籠里

北枝ハ加賀今澤の研師にて御法
ハ芭蕉の門人なりしとせ生城下
火災ありて北枝の家も類焼せり
人々あまた訪ひきたりしに
北枝平章にして
やけふるされども此ハちらぬ生
かく風雅の章情をあらはしけり
ちて後又類火のあふ焼ひれば御友
従者人先に走り来りて以前の
章情いかゞといひたまふれ
のろともに枝も筆もすてと成
けぶりのうちに一つそもさん
北枝こたへて
のろともに枝も筆もすてと成
そのことの葉をかくあぞなき
此時御友集ひて焼れ辞といふ集
出来たり後翁の塚に詣て
笠きて塚をめくるや此時自
文学風流北國に名ある北枝人なり

神楽忠知ハ文武に名ある人にて
御供ハ井坂喜清に学び遊吟を
誉れあり
志ゝ岸や焼ぬむ辺の雪の枝
此句より白炭の名称と世に称せ
らる行ひ正しくして四書を傍に置
ざる時なし然れども不運に志て難あ
り俗者の為虚名をうけて塾居
し身に曇りなければ迷に中枝くハ
安けれどかくてハ身の科を遁れん
とて其君を暗愚に云なせに同
じと一言の是非をもいふ罪を
身にひきうけ復十文字に捨
切て相果しハ建築なる人也
云傳へし
辞世
霜月やあるハなれ
身のかげぶうし

佛行坊不覚ハ比叡山無動寺の傍にて中年に院を辞して坂本に隠居して俗情をこのゝ
周果 麁穀の心を
怖しさる報ひに拘るかしが
故ひとつにかどとらぬる我身ゑ
生魚荒を好きけれハある岡山法師
多く来て此坊の荒をうる不覚の日
此荒ちらぬるに又も飛びあひ来見
と得せしが又の日皆行けるに茶荒
出すのゝにて殺日何ののてなしもなく
夕方に空拔にありけるへかゝて招ぎ
なへる西へ何ぞのてなしも有べれに
何もなしと法ぶ如けバ荒をきてさそ
もにがくしき山法師の所かゝる荒
をつゝみなゞら狂飽ゝこゝに
喰物のとあるとハたること
知らぬ心なり山王や大師の
冥加ゝハよもあらじと
戒めるハおかしきなり

日枝不覚
俵拘ゝ
れ
かさも
あり
冬だも
里

演萩ハ京西原雅波屋与左衛門
抱への花女なりしが家宅は江戸の
曲輪へ移るまゝにありて花女十一人
連れるに定りける演萩も生国
なるまゝ近き辺りにある父母を殺し
来ぬりかんと悲しく父母をも伴ひ
てちらんさを願ひ許さぬ客に
かゝらひ歌しに彼ら孝心を感じ
給金を与へてあるじに形をけれバ
費をいとゞ形ハ事とうけ引
けるバ形て同道してあり演萩ハ風
雅に逸らぬ徒のんなれハ勤の怠
りもなく害も絶望なく此家おのづ
からさん昌志けれバ演萩が親にも
茶屋のつ世なるとしつゝ出しと病
萩も日々に安居を防ひて孝
心世にかく通なりしが
後に富家へ根びきせられ
再祝をも案備させたり
とき孝のめぐみんなり

演萩
うき人
手の
恥しき
火神
の

大野秀和 和ノ西國の大守ゟ仕へ
嘉禄の武ゟりしが称ゟありて
渡くせうごも武道をこゝろぞ
ち為ゟ変ゟて西刀ゟ帯せり称ゟふ
せ角ゟある才ゟて秀和ゟとゝを吸
そ笑へるゟ中ゟまゟりゟありり
猿ゟそゟきゟいきごゟりゟ治ろぶ
折ゟう西國の極のよゟそゟ非せ
角ゟ行ゟしれゟ変ゟわゟうけて
いろふせ角何ぐ方ゟそゟぐの
工ゟせーゟ常ゟ務負せよゟ力の極ゟまをゟ
うみさゟ甚角巻ていろゟもさろと
ゟーさゟ迷根ゟ思ゟいもゟゟ相ゟ
ゟゟうんそゟぐくゟ度終ゟそ志し
まちゟゟと猿ーゟゟげ茎屋ゟ
ゟちゟぐごきんゟれとゟもつゟび
ーそ通中ーさゟ秀和ゟ真さゟーろ
けゟと笑ひて消ゟろ
ゟも風流の一落へろ

大野秀和
鶏や
と
かう
みゟ
雲
名残の梅

路通行脚の節ふて彼の草ゟ欲
蒲のあまり實成をそび盃をく
ゟ要ろさ

いやさろれそそる庵りの苗の苗
古ゟを立生ろそ

消ろ村ハ氷も治てそーさん
行ろえの歌ゟ
ゟのくゟゟみ庵ゟ
老ゟ若ーて道ゟ枕ろろ

い松ノくとゟふろて年の暮
芭蕉行脚の時おゝし庵流の俗ゟ
乃び路通舟一首贈ゟまりて
こゝろろ浮世も旅の仮ゟゟ
ゟづくも草のよゟれくゟゟし庵ゟ
翁歌ーそ路通を讃ゟ我ゟ従ろ
来ゟべーと体分の湯をそ為ゟ
四くとゟ法ゟゟ傷れゟゟ
こんごも旅翁の老ゟ通ゟことありて
水ゟとろのんぶゟ翁終焉のころゟ
跡をゟるさんしーとろや

木因ハ美濃大垣の人にて蕉翁旧
識の俳士なり其気韻を出かし
こけハ翁頃ふ夢の見ありける
行脚の時木因が家にやどりて
かくれ家や月と菊とに田三反
木因悦びて翁すなハち此句に風流
の威光あることを感じて其家宝とし
[illegible]せり翁も江戸を旅立て
のざらしを心に思ひ風の[illegible]世俗の
破れを覚ぬを旅して
死にもせぬ旅寝の果よ秋の暮
と吟じ江都にのぼれハ木因も[illegible]
舟にのりておくりしぞ
秋のくれゆくさき／＼の苫屋哉
萩にねようか荻にねようか
と翁ハ立別れり木因が
妻ハおくれる人を悼を
[illegible]
[illegible]

木因坊

旅人や
伯り
合せて
ふ彼の月

曲翠ハ膳所の士菅沼外記と称
馬指堂といひて蕉門の俳諧をよくし
て世に志ざる風調
[illegible]
本性をの程を清く[illegible]
馬[illegible]枯[illegible]の[illegible]
同列の士曽我権太夫といふ者の君の
寵を[illegible]上下の[illegible]
[illegible]その奸邪を憎めども[illegible]
[illegible]
ハ主家の[illegible]
[illegible]
心静ふ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
の[illegible]
忠識の[illegible]

曲翠

念入て
冬や
清む
椿かな

大高源吾俳号ハ子葉といひ文武にかしこく其行儀ハ世の人の勢有なり俳諧ハ水間沾徳の門に入風調雅情あり

日にやけていぎ笑ハ思ふ山構
初松魚江戸の年子ハ四季の行
菓もよく志て山田宗編と交り諸
侯の席へ出て世の風説をきく主計
憤死の恥をそゝがんとんを辟き家
をやつし猿掃竹をうり我おもふ
方を終日廻り西國橋にて其角に
あふ大なるが姿をいとて涙をとゞ世
源吾かくそうなく紫公にありつく
までハうる世渡りとゝハ其角もあ
はれに思ひ

年の尾や水の流れも人の身も
いくけまゞ大なる
はふハ作うりあれ此ハ船
その翌日討入本金をとげ
衣を朱代にかゞやうしぬ

大高子葉
なんとも
その
巖も
通ひ
桑乃弓

春帆ハ富森助右衛門と号ハ赤穂の
義士にて浪人の後大津の伯父の方
に居て母に仕へて孝之同士と東國
へ下る折から母にいとまを告げるに
母も悟り志るといへども色にいづきぬ
志ぞしの別れなれど老の身ハ定方也
と小袖一ツ出しとまハ吾らしなるれ
ど寒ふれときなれど兄を思て行べし
と樊噲のふることなど物語志て体
のことをそへ別れてのち母ハ自殺
其富森拾心を鉄石にかゝる主親
の敵と討入に別して勇猛をあらはし
その後ハ頭けまなりても身を慎
翌年二月切腹遂げれむね作りこ
されるに有ざるにて感涙を流
し幸ひ四月ハ姉の忌日なれど悦て
先立し人もゆりけりはふの日を
つゐの後路の思ひ出にして
春帆年齢二十四歳なり

富森春帆
冬鴨の
身ハ
むし
らる
後
行来この姫

桃隣は伊賀の上野にて芭蕉翁の
門子に年ゆくして仕へを辞し俳
に狂ひ江戸に帰り太白堂桃翁と
いふ翁の奥の田道を慕ひ元祿
九年陸奥に行旅を首途に
何國まで花に呼出せ貴賤
荒野宮天茶にて
鬼の血といふその出か姉だが
土浦にて
出うら花や手にとる筑波山
汲む船の網にむかし横川
日光山にて
雲ゑやうせまぬ瀧のうら表
紀行をむつ千鳥と呼し雲堂の
峻なり桃翁或家の旅客の相伴に
呼ばれ一下なくに手ゑ鉢に於ては
手拭ありしを盗て帰り一夜日を経て
礼ふこのれくに
うへるさに手拭ぬきも異さが
享保四年十二月九日死

太白堂桃隣
春ら
もこ
や
雲も
れちぐ
水の色

野坡
葉ぶく
れそく
見
ても
狗臭乃
浮世かな

四十五

秋の坊

秋の坊は加賀の士なり後法祥して
於歴し湖南の幻住庵に訪ひ来
まいれ蕉翁こゝめて
我扁は敷のちのさまを死生が
秋の坊も遊世の身なれば世の無常
迅速のことなどねんごろに於ぐらり
やがて死ぬけしきは見へ侍ぬ
是をのこして我にかくり
多くふり来せ求れるに三衣一鉢
の外寒暑を志のぐ自隠なし
万子の待へ岸をこゝろとて
さむ日まいれ山より下をとぶ
もはうち荷ふ人ぞこひしき
これ炭の字を嵌してよみしん
清貧にして世捨人は死後に未銭
の残るは見苦しとなり正月四日
郷友李東来りて於ふ秋の坊曰今
度吾磨を作まり呼べしと
正月四日よろづ此世を去に辺
此夕を吟しうつぶひて死ス

秋の坊

牧童

徳元

月

綱代守

舍羅は難波に住て雅と貧に名
る狂人なり蘇る鶴蝶に莚をう
け西霧を志の花蔬を盛て穆
とす和の諸もなく妻と子おのれ
と三人射を曲て枕とし尤しりとし
て乗む俗勢の俳友に勝ちまして
萩芦の友達や此志ならくさ
又加賀の北枝雲風流を志ひ訪
ひ来るに舍羅も家にありて如の
くるゝまで郷の抱語志てとかく志て
空役になれば北枝と人の何ぞ役
ふさぐ抱やなると見るに答て見
ゆふと紀貴家に一のつのりはなし
平紙袋に米なりを焚て来らせん
といふ北枝さぐりて見るに
米二合をうりもあらんといふ
さらば其米にて四人の口を
養ふべしされど役ふくるゝ程に
来らせかくしといふ
北枝も其雅を感じぬ

一蝶は俗称多賀朝湖俳名を和央
又曉雲といひ芭蕉に学ひ其角
嵐雪と交り深しあり尚其角と同
道にて深川に至るに向ふ藤樹
と臼の同切りと来るをみて一蝶
たがかけのこがたがかけて応ぎらん
世をうもの同と思ふるまぐ
其角が附たりける其後一蝶は其角
にて鶴に出る時其角小船にのり名
ごりを惜ふる時一蝶ハ吾鶴に至
らば魚を裂干物にもする業をせんとが
さいふる魚にハ必ずらに砂を入ぬん
されば砂ある干物江戸に来らば我
此世に有と思りなくといひて別たり
其角支か干物をうふに三年ゐるゝ
砂ある干物を買一蝶の存命を思
ひ悦ひの余り親友を呼干物を上坐つゝ
魚を蒸に蒸をまぶも日の時西に
十二年の後御教にあひ江戸にかへる
享保九年正月十三日死ス

舍羅
蒲乃
穂や
六ぎ
うつまる
軒の法面

英一蝶
公魚
色し
化しやせん
水社雲

惟然坊ことば、西国ケ条の者ゆゑ
もと富ふる者ありしが貧くるう甚
門の御人ゆゑ風狂の人ありある時
筆と無ふ焼捨せーが本花ふたる音
庸々帯を解兎を巻て寝れバ
翁ふと惟然ハ天窓の毒うふ家を
ふとしーやと笑ひーとあり盤石を
和藺ふ飛り風雅会俳とをづけ
風ひあるく

なづさのむ柱の本もとうる夜本立

ふたのあふれひの本なるむあるさ
ふ人の浪宿宮の豪家ふ婚ーて
ありしがなの狂ひありくのちの書信
ふくもる附町の中で行あひさう娘
へ供二三人つれてありしがなそい
ふ伝ふ西ふあるやと人同も驚ふ
付て浸れバ惟然坊涙ぐんで

両神ふさで何とふく附句ふ

宝永七年 五月廿七日 北去ス

惟然坊

さみだれて

ふくる

霜夜かな

葉岡臭仏

神風や

きそ風ふ

はふ

稲のそれ

貞佐の妻 臣平二郎とのひく甚角
の門ふ入る生娘 律義ふして 特情
あり子楽妻恨をそゞめ赤穂の士
多く恥しめり無るふその人々嫉恨
の浸四才へちりて去伝もた元真残る
侭けるふあ斗神通ふ五郎ふあひ和
語のほのぐ神語 裏のるあらうそ

どんて入るまゐらくふまゐね教が
貞佐堂て別ま が ぎらくふ湯ケ
千ふ人くはあ良教ふ家ふ入の
ーふて今おたりへ教ーこのく
ふへ教のるふめさうと漫ふも入ひ
ふふ行陽をさの人残ふけれ利潤を
代りふ亜泉岳寺ふ参ども収を剃て
入ひ大和のふ人をほとも塗ふくはる
中ふそふ枠忘れよ種ふ名こふあく
ーとのへふ堂かり寝ふ教ーふ織も
ふ風ふるれバ生方へ事ふて太の
吹寄をや級入のふひけーなど
忠極禅寺のふあり

その女は伊勢山田の産なり和尚
をよくし俳諧又佳境に入る一時
軒一有が妻となり一有没後江戸に
ある生物り大和を巡り紀行の吟
数多ありいせを立宮川に
色あひもコ川かに妻の歌明が
手をのべて折ゆく妻の菜ながら
伊賀越に
山松のなしに志ぶくも
ねぶさかる人まなるをそ教様
たいまのまんごらを狗こ
衣こえみづからおらぬ罪深し
法隆寺にて
二まはりもよりそふ若の歳かな
白化女の優しみを求め貴しべし
貞操を守りて俳の産なも男と
庠を並べ後和鏡と改め享保
十一年四月廿日七十四にて終る深川
霊岸念仏堂に葬ス

園女
花れまへは
新
たづ
りしや
旅
ころも

擢ら庵は伊賀の者にて其角の門
人となり京に住り文雅の賞あり
うしろ向の達ケの賛に
たちらむけ酒がいやなら雲の鐘
帝袋の絵に
小袋に大に入まて志ごころ
此句を黄檗の紫芝和尚見ない是
でいまごとこれ我ならむ
底ぬけの袋に実ふり枝ものの花
とまべしと志めされし数へ恭と剣
平後志ゆく法の意味をとひ生死の
理をきけハ和尚答て
あるなしのうれぬ物そのあるよ
きのふの夏がはるさめ秋ぞ
擢ら庵へ
ゆめに死しゆめに生るく能接切
さめて苦をまる釈迦より
さらに欲んなくあるものを皆非人に
あざとし景色をながめて
熱がむけバ林にそよふり庵の妻
此句を出て死去ス

擢ら庵
行水に
沈
なぐ
ね
伊賀の
蕎がら

紀伊國屋文左衛門ハ紀呂雄堂より
おて大笑の人之書を佐文山ニ学ビ俳
諧ハ其角の門ニ入り俳号を千山と
いふ我不同盈にて大ニ家富ニ居り活
氣の性ニ志て曲瀬芸居などニ招ビ
千金を投打て名よしとす時の人紀文
大尽と称して生居四方ニ名し本
八十歳之十月ハ皆紀文の居宅之毎日
定る事さし七人ニ入来るとハ客城
迎へるニ我ニ志れを賞へ入るとぞ此
一ツ事を以て一家富を知るべし五元集
ニ千山事とあるハ紀文が宅なり
紀文が一ツも俳諧を好ミ飛山と
いひ後明酒といふ紀文正徳の比家
衰へて利發志て深川一ツ居ニ迎
享保十九年四月廿四日
隠宅にて北去せ遷葬る
惜中淳等院ニ葬せ帰性
駐桐信士と称号せ

紀文
さり
うへせ
老
れ
ゆれこや
古周千

杜口ハ飛語の産にて其蜩庵と号し
生涯俳諧を好ミ自作ニ妙を得ル
世を辞して北山ニ隠居せる時人ニ
対らひしニ答ふ
くちなしの見えりもせぬ事なれ
此る世ニ貴せらるゝ行状雅俗ニ已
ふり廣く見聞のいさかしありけれ
ば人集ひて俳諧を学ひ結れども
老後耳遠くして人の変りものかく
思ひ古書の抜ふしれを深しまこ
ふべからず見せのみを学ニまつせ
法遠くをなくさめ能筆にて根筆
も強かりけまば恬敗積りて二百巻
ニ及ぶ題号を翁草といふ勿言の
人めんくの好ミニあるる
老ヶを借りうつしとあて
拾遺ぜり年八十六にして
享保二十年二月歿せり
是も近代の一奇人とその
徳を賞せり

其蜩庵杜口
咲そ終し
日
よのり
風れ
悔り
花

沾徳ハ水間次郎左衛門といふ人の所縁なり
しが若年より俳諧を嗜み磐城侯へ出入
なせし風虎公露沾公の御側へ出
勤し号を宝生流の謡曲に遊
ばされ御座敷へ出て数寄の事をひく
其又俳諧達者の僉しも御相手と
なれバ御家に召されて恩を蒙る露沾公
より一字を賜り沾徳と改め日々勤し
に上達し遂に一風を起し俳諧
をもつて世に鳴る風雅
扨我はいふがかふ人の俳諧
さび稽古して蕉の翁の教
へと相合せ甲く帰や其流
えなし職人を見る時この風
雨性の景の流をうつせ程のこと
じ人俳書のあり東堂の教
を実にかゝるとを残せり
享保十一年六月晦日六十二にて
世を去る本所本恩寺に葬る

其川ハ越前三國荒田屋の抱女にて
俳諧に名高く風吟
さそのあはれしく思ふれ
たんてもんの和せ合はれ
ある時江戸の或俳家某殿家に招ばれしを
する折しも其川ニまつまを一見
せんと訪ひ来りもし俳を読む事
ある江戸屋家に帰る道のかへ
心よく待ひきのひぬ其後主人に
別をあげる日百日のやまをこゝ
笠卅枝に別を去りし恩ある時
中の者るあれど只遊ひのひるかれ
くるさまを来りしとりらに俳諧称
のよくかゝりし道の花あざ
感じて日を送りとぞめの同列の俳
諧のみの其川が風雅をまぞさし世を
あくもののもの数多あり婦の身は後々
の貞列馬五匹に荷せて送りされど是
を主人に話とても其後出村に一家
に産を結び其身世を終へたり

乙由は伊勢山田の社司慶徳圖書といへり其ふ隠栖を好て人淳く礼人と云なりを嘱ひ麦稲の中に庵をつくり麦稲舎といふある同人来りて俳諧を学ひ乞ひしをのべ下愚の者ゆゑ遊ぶ入べれ名流ありやとよふに答て心ざし深切なるべきのこむづりし紙柄のもなかば又同殺るは何ゆうのこと紙や作るや又答て其服の前さ為紙云のこ然るは一句なりせぬへ乙由安きことなりと折ふし畑へ出し男ひときげに鍬をうらげ出くをうらく

一面性のくさかうげ出くさむさが乙由在里其居へ出く俳云ありなし在安を使ひ其居に酒汲かれし真せりまた翌日其居に被在女外の客と見物に出れ居て乙由方へ菓子などおくり毛はにとひこしれば

深草やはふはむかふの岸にさく此答世に業して名なるし

乙由

そて

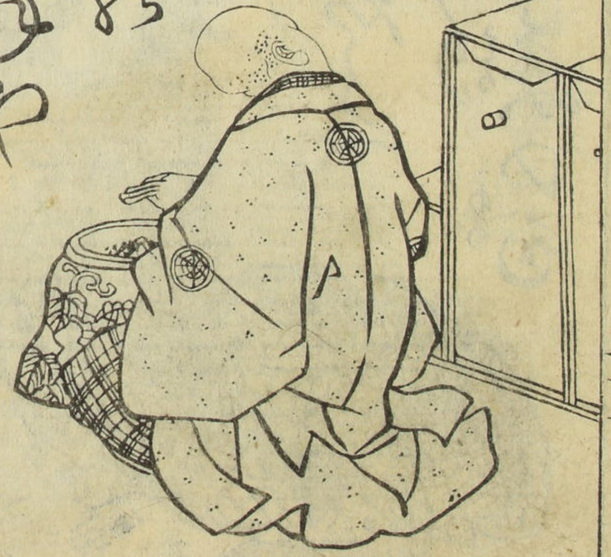
皆

扇

れ

あるや

この麦の風



治涼は伊勢國菓屋の產にて地名を以て性とし父を豊程舎行尚といふ治涼東武へ下り一晶が門に入り南紀飛と呉し世に志らるゝのち霞洲公の門惠をうけ一字をいたゞれ治涼とはらゝる此間の句に

十分に治ふそらや夜清くそ

りとよりまゝにして和漢の書を眼をきたし俳書をあまたなし

江戸城下俗諸志をかきて古語を導れ宮良土產を著して淫曲の惑ひに先ぶれ世變後に於の始末を志るべき俳諧の句体は

のあとし結一里も裏の秋明から

深草や花のうろこの志の抜

其も宮に宮も其にありけり

其の雪や雪のくさの消るほど

延享四年十月十四日ゝ歿七年

六十四於玄朝寺に葬す

菊岡治涼

人乃

れ

さく

なり

竹の花

ざかり

二川は越中富山の産にて世々の太守に従て武道に心掛深き人なり
蕉門の俳に拘ひて風調移あり
琵琶くと松風吹やひさ此花
夕くまをなれのこしてや蝉の声
ある時都にのがれんことを思ひ又江湖に雛友をも試れんとんを楽し浪居の頌ひをおもふさらに居るしのそ江湖て加賀をあたりひそうに止のつん斗ひありとても此侍にては遊びのこと思ひもよふ所と自撰そりこゝろ入道となり家を立さるとて
宋くまる人中は迎て花にゆる
此旨を障子にかきのこし立出なり
太守ましく此ことをきこしめ外にもなく狂言されて孫はその侍のなり召仕なるし老後富山所山里に庵を結び生涯家族に世をるごせしとなん

越ノ二川
手枕
の
枕
室
なし
寒
枕
梅

稲津祇空は浪速の人にて始め青流と号し学に貼り待文を警ひ諸国に歴のんおて箱根早雲寺にいたり宗祇の墓の前にて誓をきり入道志て祇空と改め奥羽北飛に行掛志て江戸へ出深川に仮住居して
孫ぬくまるあのふどそのく紙子が
梅やしきに行く
梅盛りまをしるどの辞もなし
女達戸の贅に
そもさんかとなさんかと出て
九年春に苦界十年花ごろも
妙直寺の大心禅師に寄を学ひ
よく禅意に叶へりとて号られし
此人都により紫野に住て散色と
いひ浪雅波が江戸へ来ん途中箱根湯本にて殁も享保十八年四月
十二日辞世
此世をばぬかりくふ里と死ぬるん
地獄つぶしの極楽とかな

祇空
梅
老
も
弥中
言
なり

淡々は其角が亂我侍へて都に
のがり祇園の辺に住し丈に富たり
家居玄沢に建衣食とも美を好き
美人も及ぶぬ奢侈を極め千名四
方に震ふある内西國方の侍より
對面せんといふ淡々是までの文通
をするに一度遊ばず必再び來ぬ人
んとて底事といひて出ざりしが志て
遊ばよしゆへさらば底事にても苦
からぬ目にうらんと名ゆへ通せよかし
淡々がよふをするに他底事に底は純
子のふとん字を拾ふ曲ちんの歌詠に
ゆられ更に獲元四五人に接られ起ふ人
まで接拶もせず不敬なれば侍
化もれて正辨見たり空の和
代るをよみせてなりられば淡々詠ひて
されどそ白が此ざて下手なれば代人は
教へがたしと云ひたり紀宝暦八年
土月八十八にて死ス 辞世
朝ぶれや秋て画し富士の山

されはたゞめ祇園町辺の藝子なり
しが半時庵淡々根びきまして妻と
奇しぬ生質利發にして風流をも
好きしが成程なく病の床にあり
て花あらぬ今の医業の術も尽
頼なれ方をあきらめ初あられの
一るを吟し淡々に向ひてやれるは
さても是までのいつくしみ忘れがた
くはなぐりもおしく志らしてくし
死でのちかなれば一家の者共かと
おさのこゝりませぬといへり淡々なりて
たのこまをすることを舌だ
こるふんと思ひ再び問ふにきこき
かしらをふりまとしもたのこまぬ
ソノヤふのぬでござりませと云ひて
笑ひくれ死にまてけり淡々もあわれ
に思ひ浪にむせび追善供養人の
孝ぶけ手を拾くし手向に
死んてあふ若も
あるふん 筒の中

不角は松月堂虚雲秋ともいひ
狐子千人に余まる面へ千翁ともいひ
けり永歳冠里公の御敵に出仕をなし
御相手となる元旦節の御相伴の時
お雑煮や草なもあぐるはこの雲
其年冠里公執政職となるせのふ
ゆへに御発地に異なりあるに
夜の夜や其ゆへにかくよみれト
こそふれの御座のおかしくして
数のまゝも立ひかしとまりだと
不角元祿に法持になり享保に
ハ法眼にのぼる末子芸道へ養子に
まぜしに始女の年婆むづかし
こそなり朱るを諫て
けむくこそのちハ孫安き敷さ
終に養家へ戻り和熟せり
不角大肉に召せし時
より政の拾ひのこりの程もぞ
九十二歳にて宝暦三六月死辞世
空蝶はもとのすごろにかへしけり

不角
暁ち
なの
ま
り
かへる
黄菊
の子

蕪村一名を長庚と号しまた春星
ともいふ日に和漢の書に耽り稗史
小説にしたり眼を通さゞるなし
伎藝をもて高貴に交るといへ
おへてへつらふことなきに招ども
従ひ生業漁獵をなりとしなく
あるに家居をまた妻子を養ふ
に残るは網おに出て漁りの魚
を自荷ひて都の方に持ち出代を
も頃にうへたのしみて俳吟せ
三椀の雑煮かゆるやお老根
むに辞てゆるやふくし白柏子
ひとりある宴を洗はせん寺林
鉢桶をとゝへと樹下の床九
年寺やかゝ鮭の古力鮭の樹
又画名を謝寅といひ
蕪力一風を記し世の人の
志る所なり此人大雅事と
對しべきよし専ら風雲せり

岩口芝村
夷の海
ぞ
免
も
ひ
の
ゆ
ゆ
ゆ

存義は武田家の武士のまゝにて
三浦家に仕へ妹聟に家督を
継せれの迯殺仕しに愚遁の身と
なり宵無庵と号しその風調
一箇ありて粧情繁し
弘法のこゝにも一字に山ざくら
忍ひし忍て風経つゝや小松し
葉かく迯の五日の月や柳めち
ご忍よ柿やおのれの葉さへ落るのに
四布五ッ布ゝのかれがのふとん
迯なのゝふるごともぬるゝ磯の浪
存義茅場町に住ける頃はどく
まづしく家居もまばらに荒
て雨ふると云ハ傘さして
能借志たり是を人仇名
して家道の歌るの西八条の
一ッなりと笑ひめれにせり
生後佐内町に居不を移し
頗る富貴になりて老を養ふ

今朝秋と志らで庭たく男の姫

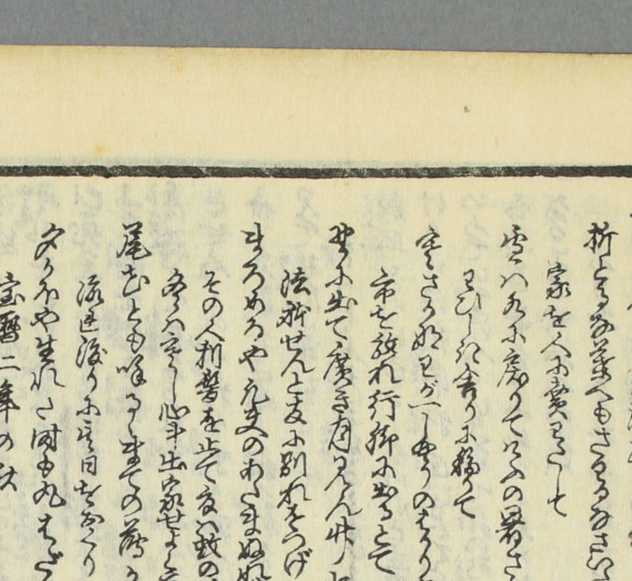
存義

野風は鉄筋三國の妊女にて容
義携はせて身着あり風雅の道にも
心ざし深く風雅を学ぶしあり同
浪迷より富たる妊客此里へ来り
野風をあけ義子その外大勢を伴
ひ荒夷に行けるが此客文雅ある人
にて詩を作り歌をよみ多紙を
削掛して扇にかれ花の枝に下げ
させ人々の無雅を笑ひ野風に
舟よりの歌をさみし我の歌なる我
ひて野風筆をとりて
風いとふ也に扇のぶせいかれト
絶冊をつけ居るしなりれと立寄り
けり三後彼客狩風ひ来れど
いふていそ人々いさめて身のみとも
なるべき客なるに出なるもなはいの
なるさゝ何に人あ是代
あり出しいかり其あとのさの名
此善人も生氣情をあらはしく
正しきるのと皆人なめなり

三國野風
来るのぞく
云よりし
宣挟

蛙井は難波の産幼少ゟ俳諧を嗜
奇少の人ゟ花の時に花を見て
折とる事業へもさるゝなさいぶま
家を人に賣ると
雪は花に居りて花の暑さかな
ゑひし花舎りに移りて
雪さらぬ日ゟ一しきりのさかり横
市を放れ行御に出るとて
雪に出て廣き月ゟんん井ノ柱
法祈せんと友に別れをつげ
まろめろや九文のわたまぬ俳
その人利弊を止て友は蚊のせい
多ハ寒し心中出家せよと云れバ
尾むとも唯ゝまての蔵かな
流匠後ゟ三日をかくり
夕ゟ花や生れて同も丸もぞの
宝暦二年の秋
のゝに咲名はこれまでそ茶の花
此句を辞世として死せ風流の道
ゝは英集といふべし

東々庵蛙井



落葉とはあちらよりぞん若ゐばこ

祇徳は石町辺に住て自立庵と
号せ達吟にて日發句をなせん
に思ふとある時
たるとて祇そうや胡蝶の花の家
ある人問幸の画の賛をたゝへ
五月面ぬりし徒然をれしか
志ゝしき小僧何がしの子息義楽
のいたりに花里へ入込兵庫屋の
紅梅といふ花女に通ひ豊秋屋の
づけして家にかゝる祇徳の門に
入て俳諧をもんぢける者なれバ彼が
母来りてさゝめく此さをいひて歎れ
バ祇徳別迎ひのものに一封をとゝ
ぼてく一句を添たり
鶯やあまりにめでくこがれ梅
かの花者此句に感じころをひろ
がへし花里へかよふことはやみるとなん
祇徳宝暦四年土月廿六日に歿ろ
柳上村大雲寺に葬せ

祇徳

花井や

きゝ

ゆく

のびく

葉を

かくさ

塘雨ハ京室町百足屋左右二といひて家兄ハ家を継て富る我ハ性風流の名山勝地をもとめて楽まんと遠く行きて西ハさつま東ハ奥羽迄至らぬ所なし中ニも富士ハ高き山にして道ニ迷ひ四日目ニ休み気絶せし果とも別ニ中ニ死ぬべくの結果ニ出てその富士権現ニ祈りける其の夜も夢ニ翌朝家の鎮まりつて草木ニかゝわり析りて嘆たれバその〳〵一筆ニ書けるに甚く是を忍ち精神さへかへり堅く覚れも忘れて卯の谷の向ニわか家あれバそこにいたり休らひふ酒を大ニ飲ぞる家ハ木曽り山の日通ふ家ニなるぬれのと粥をぶどうを世話をなりそうへ我らしても甘露のあまりとしひに終て甘露ふうてと称せしつ人国の中ニ牧年行脚の記を筆録選集とそいまだ終らじ書りけり

百井塘雨

声ほそし小萩の花もちらきさて

瓢水ハ播州加古郡別府村の人其家代七艘も船もてる豪家なれども其身放蕩ニして家つ〳〵盛ぬ風流ニて異風を好むなか年の秋姫路慶雲寺の家風をまね名刹ニ在かるそ〳〵めらふ瓢水行清さハ其ものて風流なるのち二三日の此とてか人をいろ〳〵さらに見もあつ明かるれ大坂への浦の風にてとひのかゝる気性なれバ俳諧ハ上手也

ある春上方へのぼるとて

此ん岸も柚味噌ニ付て浜の上

其の妻ニ暮ふるので

されバとて石ニ魚とも見せられば

達磨のみとろ向の顔ニ

叙きれいバしも染もなし山の華

怡道のるニ

有とても家ハ此世の水の月

瀧野瓢水

かつちりと打ひうちおるる去年のめし

雨青ハ渡速の者にて異何某ゆゑ
いふ冨たる者なりしが驕奢甚く
秋を投打て放蕩なりし故有て
あづまへ召るゝことあり其道中にて
人に辞れつゞひ清りのありしが
笑ふもの笑されてうんよ花の旅
其後ことをそく雅波に成りたるが
産業も減じて貧しくなりても
拝具に教秋してうれあるに
頃ハ城に出られてうんさに宗長が
かくて古々にも往愛く京に移り
ても過奢のん止めがたく衣服とも
美を好き導こう按後をそるにも
おかげにて妻に琴を弾せるを覚
とし癒治ハ心志がめてなすべきに
るといへり是ハ唐土にて蘇合東
を頂くあいだに嫁る業を
号て蘇合園といへる故事
より思ひよれるよしなり

士朗ハ名古屋京町に住専庵と号
医術に鳴り頗る勢ひを得たり
毎朝門人に個合を申付け其身ハ
別席に徐を取て病人を投るぶ
種人来て俳諧に及びて繁く少も
さらに其機を失ふことなし是つまの
人の及ぶ所にあらず本居宣長氏へと
交り深く文通ありしある年
士朗大和に行御志て歌父山耳を
山ハいづくと尋ねあるくに川のあな
たに木葉の立て居しにのうし
掛けさんのうし物こそんとひしめ
きれど覚へるけしになられば
とのへも再なし山よりの紫橙
自賛のる
なむ月夜なむ雪時雨辞たれ
琵琶とりて志ぞし秋月の雲
一字法し愛るかぎやちる紅葉
生風個後世慕ふりの意く
名を四方に弘む

建涼岱ハ建部なれバ建の一字を
用ひ浅草寺門前に住し雷雅門の
風神の袋おへるがおかしと自ら号
を涼岱と名のり文画好みの歌の
筆まへ綾足と称し画名ハ寒葉斎
其との著述の本西山物語吉
野物語古今の俗にて綴れり
俳諧の句作との上に出る者なく
或人その意に叶りて梅を好む
これハ加賀の千代の句を預の礼に書く
少も倦れし人なれど放蕩にして
古学を業とするを思ふ文画
をもて身をたてしまと云べき
還俗して俳師となり碑るがごとく
碑なきがとく云るべからざる人なり
経波におよりても陰々と古人の上に
ある者なとしふ年八十にて
安永三年三月十八日没ス
弁じ上弘福寺に葬

也有ハ尾陽の士にて俳諧に長し文字
に名あり鶉衣に志るせし俳の掟
一 飯ハ三石の掟を守るべし
「菜の心ろを去らぬ菜の盛り
一 汁一ツ菜三ツ酒の肴も一ツに限り鯛鮑に
精進のものを添るべし姿ハ花子を
用ひ豆腐ハ三季に渡りまるの数
漸増あり
一「吉い事も甘露や豆腐の名の露
汲ハ路の前後を見べて三盃を限とし
一「いかさ身に四ツハくらし村時雨
連衆に好みありて此茶の掟に甚ぎ
くらわぬ誰でも茶の一るを志めも
一「撫さへ五こんとぞりの霜秋かな
薫に味の香りを見て先勢豆と定むべし
「ゆり並に去たる袋ぞてならもきかな
一 燈ハ行燈にてことさるべし
「燭燭ハさらとの名の夜さ
右録く
天明三年六月十六日八十二にて没

大橋蓼太は宮麿居士と称し
雪中菴三世を嗣で此道の氣韻
をくぐさ孫麿を以て其風調
ふせもありつゝ送るもあり女なむ
二ツ法ゝうおくて淋しアひとつ
埋井や塚ゝ世は苔の露
追れてや月に涙ゝ蛍ゝ
露の身の徒ゝそ白そゝ
白銀の猫をも捨るむの旅
深川芭蕉庵の旧地を慕ひ我寺
要津寺地中に古池の形をうつし
小堂にハ蕉翁の木像を安置し
同所の奥に地を求めこゝめも
像を埋て俳塚と称せ斯信を厚
くし道を守られれば其身慕ふ者
多く四時の吟若干にして生涯の
編集多し天明七年九月七日
歿せ七十歳要津寺
俳塚のうさまゝに葬せ

大橋蓼太
雨間
以乃
入夏の
社とう
種姫く菴

編者　緑亭川柳
肖像　雄齋國輝
真寫　楓園玄魚
彫工　江川仙太郎

小井居編集
續俳人百家撰
中本一冊
諸名家揮筆

此書は新古の年代をつゝるこゝぞ前帙にもれ
たるを拾遺し菊岡沾涼乾什完来白雄
宗瑞一茶乙二成美道彦士朗巣兆に
いたり近かくは蓼松蒼虬梅室卓池り
おのび名吟を撰て正しき實傳をつゝく
俳話のおりしろれこのゝをのせる

嘉永八乙卯歳次孟春發行
東都書房　甘泉堂
芝神明前
和泉屋市兵衛板